村上春樹
『鏡』
レポート集

(第55回)2026年3月21日(土)13:45～「鏡」第1回討論
(第56回)2026年4月18日(土)13:45～「鏡」第2回討論
(第57回)2026年5月30日(土)13:45～「鏡」第3回討論
2026年7月11日(土)　「鏡」レポート締切
(第58回)2026年7月18日(土)13:45～「鏡」第4回討論
(第59回)2026年8月15日(土)13:45～「鏡」第5回討論
(第60回)2026年9月19日(土)13:45～「サウスベイ・ストラット」第1回討論

3 4 5　7 (8)　9 10 11　1 (2)

目　次

○続「鏡」―「鏡」レポートとして―……T・T　(1)

○人間にとって最も怖いもの ―― 村上春樹『鏡』を読む ―― ……佐野　之人 (3)

○「鏡」村上春樹 を読んで……田中　克典(10)

○村上春樹「鏡」レポート……加藤　千佳 (12)

○鏡を割れなかったばっかりに……大藤　渉 (14)

○「私自身」と向き合うとは……加島　里奈 (18)

○わたしを見るわたしは自由か……岡部　昌平(21)

○人は自己同一性をどのように超えるのか――村上春樹「鏡」を読む――……村上　林造(22)

■「鏡」本文……(28)

○佐野:
○大藤:
○村上:
○奈原:
○田中:
○岡部:
○加島:
○楯谷:

「鏡」レポートとして

続「鏡」

T•T

え？　僕がまだ話をしていないって？
まあ、確かにそうだけどさ、さっきこの家のご主人が「鏡」の話をして、今夜はお開きってことじゃなかったっけ。僕は幽霊なんて一度も見たことがない。超常体験とかドッペルゲンガーとか、そういうのを経験したこともない。残念ながら、本当に話すことがないんだよ。
ずるい？　一人一話がルールだって？
仕方ないな。それなら、僕が心の底から怖いと思った体験を話すってことでいいのかな。
いや、いいよ、拍手はよしてくれよ。僕の話なんか、ご主人の「鏡」のあとには絶対蛇足だからさ。幽霊も出てこないし、超能力も出てこない。僕が思ってるほど怖い話じゃなくて、なんだということになっちゃうかもしれない。それに僕がしゃべると、雰囲気ぶち壊しになりそうなんだけど。
何でもいいから早く話せって？　ではとにかく、手短に話すよ。

まず、正直に告白すると、今夜のみんなの体験談、僕はあまり怖いと思わなかった。面白い、素敵だな、とは思ったけどね。
例えばご主人の体験だけど、何がその恐怖の核心だったんだろう？　鏡の中に「そうあるべきではない形の僕」がいたことなのかな？　その「鏡の自分」が心の底から自分を憎んでいる、ってことかな？　それとも、鏡の自分が手を伸ばしてきて顔を触ってきたことかな？
あ、ご主人どうか座って座って。答えなくていいから。
要するに、それは全部「自分自身の危機」なんじゃないかと思うんだよね。ずいぶん乱暴なまとめ方かもしれないけど。
で、「自分自身の危機」ってのは、突き詰めると「苦痛」と「消滅」のどちらかだ。少なくとも僕にはそう思える。ご主人はどうだか知らないよ。
「罪」はどうかって？　そうだな、罪は苦痛をもたらすものだから怖いんだよね。苦痛のない罪なんて、そんなものはないんじゃないかな。
「憎しみ」だってそうだ。憎しみの結果として自分に危害を加えられる危険性があるから、怖いんじゃないかな。例えば君たちがここに来るまでにアリを踏んづけたとして、そのアリにどれだけ憎まれても、痛くも痒くもないだろう？
そして、苦痛というのはたぶん、生き物に取り付けられた警報器みたいなものなんだと思う。ずいぶん不愉快には違いないけど、警報音が危機に対処する行動のきっかけとなることを考えると、苦痛とは本来、生きるためにあると言えなくもない。耐えがたい苦痛のために自死を選ぶ場合も、そういう人は決して消滅を望んでいるわけではなくて、本当は生きていたいのではないかと僕は思ってる。
いずれにしても、最終的に僕らを待ち受けているのは消滅さ。だから永遠の苦痛なんてあり得ない。そんな風に僕は考えているし、僕にとってそれは単なる事実なんだよね。

その「単なる事実」に初めて気付いたのは、11 歳の時だったかな。きっかけは覚えていないけど、大したことじゃなかったと思う。
この僕はいずれ跡形もなく消滅してしまうと決まっている、そのことが心の底から怖くて怖くてたまらなくなった。言わば僕は、11 歳で死刑宣告されたようなものだった。この刑は必ず執行されるというその厳格さのために、その瞬間は遠い彼方ではなく、たった今のすぐ次の瞬間のように思われたんだ。でも僕はその恐怖を誰にも話さなかった。親も先生も僕を助けることはできない、僕は

自分の消滅つまり「死」を独りで死ぬしかない、と子どもながらに理解していたんだろうね。それに、誰もが一様に死刑宣告を受けているというのに、僕一人が怖がるのはおかしいじゃないか。それで僕は、昼間は心に刺さった棘のような恐怖をなるべく誰にも悟られないように努めながら過ごし、夜は布団を被って丸くなって震えていたんだ。
そんなことが１か月くらい続いたと思う。親はちょっと息子の様子がおかしいと気付いていたかもしれないけど、何も言わなかったね。思春期に入ったか、なんて思っていたのかもしれないな。

で、どうなったかって？
恐怖自体が全くなくなったわけではなかったけど、慣れたんだよね。その時、人間ってどんなことにも慣れるものなんだ、って感動したよ。
それからは良いこともあった。幽霊の話を沢山聞かせてもらったあとでほんと悪いんだけど、幽霊が怖くなくなって、夜に一人でトイレに行くのが平気になった。だって、幽霊がいるってことは、霊魂があるってことだよね？　それなら、僕は死後にただ消滅するのではなく、霊魂が残るかもしれないってことにもなる。だから、幽霊がいたら素敵なんだけどな、と思うようになったんだ。
幽霊だけでなくて、恥とか失敗とかもあまり怖くなくなった。おかげでいろいろやらかしたけど、それはそれでいい。どんな情けない思いも経験も、僕と一緒に消滅するんだから。君たちはそう思わないか？

ところで、僕がこんな話をしたからといって、ご主人の鏡の話を否定していると思わないでほしいな。心の中だけなら、超常的なことだって何だって起こり得ると思うし、あのような状況で鏡の中の自分に支配されそうになったら、そりゃ怖いと思うよ。
でもさ、それから 20 年以上も、まるで臭いものに蓋をするみたいに鏡を避けて暮らすというのは、やっぱりちょっと違うんじゃないかという気がする。鏡の中の自分が自分を憎んでいることはわかった。でも、どうしてそんなに憎んでいるのか、まだちゃんと聞いていないわけでしょう？
もちろん、僕がこんなことを言えるのは、僕がまだその鏡を見ていないからかもしれない。でも今夜ご主人が鏡の話をしてくれたってこと自体、一つの兆しではないかと僕は思うんだよね。だから今度台風が来たら、僕が鏡とビールを持ってくるからさ、みんなで鏡を見ませんか？　そして、鏡の中から何かが出てきたら、言い分を聞いてやろうじゃないですか。いきなり仲良くするってのも難しいと思うけど、上手くいけば一緒に酒盛りが出来るかもしれないよ。
嫌だって？　お前なんか呼ぶんじゃなかったって？　ご主人、それは酷いなあ。
え？　いつ怖い話が始まるのかって？　たった今、怖い話したところなんだけど。
ちっとも怖くなかった？　だから最初に言ったじゃないそんなに怖くないかもしれないって。
雰囲気ぶち壊してくれたおかげで今夜は安眠できそう？　そりゃ良かったよ。

〇楯谷：そこまで怖いというのが腑に落ちない。「自分の手に負えないもの」、「知らないもの」、「危害を加えるもの」が怖いが、そういうものはいっぱいある。「こういうもの」に恐怖を覚える、それが自分に関わって来るから怖い。「総毛立つ」怖さ。「鏡」の主人公。「私であり」＝「私でない」。
自分が見られたいという人もいる。見られる準備ができていない自分を見られるのが嫌。見られたくないものを画すことができないから嫌？根源悪的な巨大なモノが背後にあると感じなければここまで怖くないが、それは自然状態だから仕方がない。自分が消えることの方が怖い。
〇佐野：それは、怖さを知っていることの裏返しではないか。村上春樹自身、この話は本当に怖い話だと思っている。「自分が消える」ことより、無意味な繰り返し（永劫回帰）の方が怖いんじゃないか？
〇岡部：伝統的な怪談＝「お岩さん」（「鏡」はこれ）、ピエロがニコニコ笑って立っている「サイコパス」。「自分」で自分をポイントしている（立てる、狙われる）。自分というものを当たり前のように持っている。
ここでの状況と結末のズレ（鏡に映った自分を見て怖いと思う）＝（自分自身が怖い＝自分以上に怖いものは無い）

人間にとってもっとも怖いもの

――村上春樹『鏡』を読む――

佐野　之人

はじめに

「怖い」とはどういうことだろうか。「何らかのもの（物・者・状況）」によって、自分がどうなるか分からない、という状況に面して、自分を守ろうとする場合に生ずる気分であると考えられる。これに対し、こうした状況に身を委ねようとする場合には興味・関心ということになるのだろう。人間には「怖いもの見たさ」という興味・関心があるが、これは根本において安全であることが確信されている場合であり、ほんとうに「怖い」ものに人間は身を委ねることは愚か、近づくこともしないだろうし、そうした恐怖が切迫している場合には逃げるか、回避することしかできないだろう。

恐怖の対象（「何らかのもの」）が「何をするか分からない」場合に恐怖は昂進する。対処の仕方が分からないからである。さらにその対象が「何かよく分からないもの」の場合、恐怖はさらに昂進するだろう。いわゆる「怪談」における恐怖の対象もこうしたものであるが、怪談は、それが「談」であるというところに、それを聞く者の安全と、理解・解釈できるという安心が担保されており、「怖いもの見たさ」の対象となるものである。

恐怖の対象が対象化できないものである場合、恐怖は不安となる。「何となく不安である」というように。不安の場合も、対象化できないものが「何をするか分からない（どういう結果をもたらすか分からない）」場合に昂進するであろうし、それが「何かよく分からないもの」である時にもっとも大きな不安となるであろう。死がこうしたものとなりうる。人間はつねにこうした不安を抱えているのだが、たえずこの不安から目を逸らしている。死は対象化できないとはいえ、人間は死を知らないわけではない。むしろもっとも直接に知っているのだが、みずからが「意識」になることによって、死を対象化できないところに押し込んだ結果、それが「意識」には不安として現れている、そのように考えることができる。つまり、不安の根底には根源的な恐怖があり、人間の日常性は、根源的な恐怖から「意識」への逃避と、不安の気分からの日常的生活への没頭への逃避、という二重の逃避によって成り立っていると言える。

村上春樹の『鏡』は、「人間にとって、自分自身以上に怖いものがこの世の中にあるだろうか」とあるように、「僕」（語り手）がもっとも「怖いもの」、本当に「怖いもの」を見、それをもっとも「怖い話」として語ることを通じて、聴き手（読者）にもっとも「怖い体験」を現成させることを試みたものである[1]。

そこで、ここではまず（Ⅰ）、聴き手はこの話をどのように聴くか、を考察し、その聴き方には

---

[1] 村上春樹は『はじめての文学　村上春樹』（2006 年、文芸春秋、261 頁）で、この『鏡』について、「僕はそのころ、一度「怪談」みたいなものを書いてみたいと思っていた。心の感じる「恐怖」を文章でどんな風に切実に描写できるか、そういうことに深い興味をもっていたのだ。だから試みに短い怪談的なものを書いてみた」と述べている。またこの話は村上の友だちが中学校の夜警をやっていた時の話をもとにしているが、「もちろん彼が実際にこんな恐ろしい体験をしたわけではない。鏡の部分はすべて僕の創作である」とも述べ、この体験をみずから「こんな怖ろしい体験」と呼んでいることに注意したい。なお、この物語ではこの話の「語り手」とこの物語（小説）の「語り手」、およびこの話の「聴き手」と「読者」がそれぞれ一致するように書かれている。以下ではこの話の「語り手」と「聴き手」というように表記するが、同時にそれぞれ「この物語の語り手」と「読者」を含意していると読まれたし。

つねに根源的な恐怖からの逃避があることを明らかにする。次いで（Ⅱ）、「僕」にとっての根源的な恐怖体験である「鏡に自分自身が映る」とはどういうことかを根源的に考察し、「僕」の体験がそうした根源的な恐怖に届いていることを明らかにする。そうして最後に（Ⅲ）、現在の「僕」が、「怖い体験談」の「主人」としてこの話をすることの意味を考察する。なお、テキストは『村上春樹全作品版』を用いる。

Ⅰ　聴き手はこの話をどのように聴くか？

この話は三カ所の「一行空き」を挟んで 4 つの部分から成る。その最初の部分は、「僕」が「主人」となって集まったみんなに「怖い体験談」をしてもらったところから始まる。これに対して「僕」は次のような感想を述べる。すなわち、「みんなの体験談」には二つのタイプ（パターン）があって、一つは「生の世界」と「死の世界」が「何かの力によってどこかでクロスする」というもので、「幽霊」がその例、もう一つは超常現象や超能力が存在するということで、「予知」や「虫の知らせ」がその例だということ。そうして「みんな」はそのどちらか一方だけを経験しているが、そこに「個人的な傾向」があるということ。こうした感想を述べた後、三十年以上生きてきて、どちらのタイプにも属さない、「実に散文的な人生」を送ってきた「僕」が「一度だけ、たった一度だけ、心の底から怖いと思ったことがある」と言って、もう十年以上も前の体験を語りはじめる。

第二の部分では、「僕」がそうした体験に至った経緯が述べられる。「僕」は一九六〇年代末の紛争の頃高校を卒業するが、「なにかといえば体制打破という時代」の波に呑みこまれて、大学進学を拒否し、何年か肉体労働をしながら、日本中をさまよう。現在の「僕」は当時を「楽しい生活」だったと振り返っている。そうした放浪の二年目の秋に、二カ月ばかり新潟の小さな町の中学校の夜警を行う。これも「楽」な仕事で、夜中に二度、午後の九時と午前の三時に全校舎を見回るだけ、というものである。

第三の部分はいよいよ「僕」の体験が語られる。この見回りは二十くらいのチェックポイントを伝って決まったコースを辿ることが分かる。「僕」はそれを、右手に懐中電灯、左手に暴漢用に木刀をもって、手を抜くことなく辿った。そうして、十月初めの風の強い夜、蚊取線香を二つ点け、壊れたプールの仕切り戸が不規則に、しかしひっきりなしにばたんばたんとなり続けている中、「僕」は二度目の見回りに行こうとする。「虫の知らせ」など感じたことのない「僕」なのに、「僕」の「体」が「僕」の見回ろうとする意志を押しとどめているような感じがする。仕切り戸の音もさっきとは違うような気がする。風はますます強くなり、空気もますます湿っぽくなる。仕切り戸の音は「うん、うん、いや、うん、いや、いや・・・」というように、「頭の狂った人間が首を振ったり肯いたりするみたいな感じ」になっている。それでも「僕」は意を決して見回りに出かける。チェックポイントのすべてを見回り、まっくらな中、長い廊下を「急ぎ足」で「用務員室」に戻ろうとする。「バスケット・ボール・シューズのゴム底がリノリウムの上で、シャキッ、シャキッって音」を立てる。しかし、廊下のまん中あたりの玄関を通りすぎた時、「突然」、「何かの姿」が見えたような気がする。懐中電灯の光を当てるとそこに「僕がいた」というのである。昨日まではなかった「鏡」に「僕の姿」が映っていた、というのである。「いつの間にか新しくとりつけられていたんだな」、そのように理解すると、「ほっとすると同時に馬鹿馬鹿しくなった。なんだ、くだらない」と思った。しかし何故かそこで「僕」は立ったまま懐中電灯を下に置き、「鏡に映った僕の姿を眺めながら一服した」。窓から街灯の光が鏡の中を照らす。おそらくこの時「僕」は、何の目的もなくただ自分の姿を眺めている。プールの仕切り戸の音が聞こえて来る。煙草を三回ふかす。すると「急に奇妙なことに気づく」。

> 鏡の中の像は僕じゃないんだ。いや、外見はすっかり僕なんだよ。それは間違いないんだ。でも、それは絶対に僕じゃないんだ。僕にはそれが本能的にわかったんだ。いや、違うな、正確に言えばそれはもちろん僕なんだ。でもそれは僕以外の僕なんだ。それは僕がそうあるべきではない形での僕なんだ。

さらに「その時にただひとつ僕に理解できたこと」があり、それは「相手が心の底から僕を憎んでいる」ということであり、その憎しみは「まるで真っ暗な海に浮かんだ固い氷山のような憎しみ」であり、「誰にも癒すことのできない憎しみ」だというのである。

「僕はそこにしばらくのあいだ呆然と立ちすくむ」。「我々は同じようにお互いの姿を眺める」。「僕の体は金縛りになったみたいに動かない」。するとさらに奇妙なことが起る。

> やがて奴の方の手が動き出した。右手の指先がゆっくりと顎に触れ、それから少しずつ、まるで虫みたいに顔を這いあがっていた。気がつくと僕も同じことをしていた。まるで僕の方が鏡の中の像であるみたいにさ。つまり奴の方が僕を支配しようとしていたんだね。

しかし「僕はその時、最後の力をふりしぼって大声をだした。「うおう」とか「ぐおう」とか、そういう声」を。すると「金しばり」が「ほんの少しゆるむ」。すかさず「鏡に向って木刀を思い切り投げつける」。「鏡の割れる音がする」。「僕は後も見ずに走って部屋に駆けこみ、ドアに鍵をかけて布団をかぶる」。プールの仕切り戸の音が「うん、うん、いや、いや、いや…って具合に」夜明け前までつづいていた。以上が「僕」の「心の底から怖いとおもった」体験である。

第四の部分は「こういう話の結末」を現在の「僕」が語る部分である。その翌日、太陽が昇るころには風はやみ、太陽が暖かいくっきりとした光を投げかけており、玄関には煙草の吸殻と木刀が落ちていたけれども、「鏡はなかった」のである。そこで「僕」は「そんなのもともとなかったんだよ。…そういうことさ」というように自分の体験を理解する。しかし「僕」は「幽霊なんて見なかった」というように、「幽霊」を見たことは否定するが、「自分自身（僕自身）」を見たことは否定しない。そうして

> 僕が見たのは――ただの僕自身さ。でも僕はあの夜味わった恐怖だけはいまだに忘れることができないでいるんだ。そしていつもこう思うんだ。人間にとって、自分自身以上に怖いものがこの世にあるだろうかってね。君たちはそう思わないか？

と「僕」は聴き手に怖ろしい（深刻で重い）問いを投げかけつつ、最後には冗談めかして、

> ところで君たちはこの家に鏡が一枚もないことに気づいたかな。鏡を見ないで髭が剃れるようになるのには結構時間がかかるんだぜ、本当の話。

と、おそらくは、にやりと笑いながらこの話を終えている。

その場に居合わせた聴き手はおそらく、「僕」の静かでありながら緊迫感のある話に聴き入り、引き込まれて行ったに違いない。「何だか分からないけれど、ものすごく怖い」、そういう感想を持つ者も少なくないはずだ。しかし聴き手は「怖い体験談」の第一のタイプと第二のタイプに続いて語られた「僕」の「体験談」を、「幽霊」でもない、「超能力」でもない、第三のタイプの所謂「怪談」として理解しようとするだろう。すなわち、〈もっとも怖いもの〉としての「自分自身（僕自身）」を、〈自分の内なる悪魔〉というように理解しようとするだろう。そうして「僕」がこうした体験にいたるまでのプロセスを〈悪魔召喚〉の儀式として解釈するだろう（決まったルートを一定回数描くこと、強い風、湿った空気、不規則でひっきりなしに続くプールの仕切り戸の音、蚊取線香、暗やみと光などの条件）。そうして「話の結末」についても、〈自分の内なる悪魔〉を「見た」「僕」はかろうじて、その支配を逃れたかに見えたが、恐怖を忘れられないという点において、実は悪魔に憑りつかれており、みずからの恐怖を語ることで、聴き手に（鏡が一枚もない不思議な家で）形なき鏡に直面させ、聴き手に憑りつこうとしている、そのように解釈するかもしれない。

あるいはそこまで怪談じみて解釈しなくても、聴き手をして〈自分の内なる悪魔〉に直面させる話だ、というようには解釋するに違いない。そうして「鏡に映った自分自身（僕自身）とは何者

か」、「なぜそうした自分自身（僕自身）が心の底から僕を憎んでいるのか」、「この鏡は本当に存在したのか」、「この家に鏡が一枚もないのはなぜか」といった問いの穿鑿をし始めるはずだ。

西洋の伝統的には神の如くになろうとした悪魔、あるいは同様に知恵の樹の実を食べて神の如き知恵を得ようとした人間の祖先に遡るエゴイズムがそうした〈内なる悪魔〉として考えられるであろう。こうした悪魔が日常的には理性によって押さえつけられているために「心の底から僕を憎んでいる」、そのように解釈するのである。心理学的には潜在意識に押し込められた自分、ないし抑圧された自分が〈内なる悪魔〉になりうる。それが〈意識された自分〉を憎むのである。あるいはこの小説の内容に即して、体制打破の波に呑みこまれて大学進学を拒否して放浪に出た時分の〈過去の自分〉が、実際には楽しく楽な生活をしている〈（当時の）現在の自分〉を憎んでいる、そうした解釈も可能である。これとは正反対に、日常的には気がつかなかった（当時の）ありのままの自分の在り方が鏡に映って、それが「僕がそうあるべきではない形での僕」と感じられ、それを憎むこちら側の自分の憎しみが鏡の中の自分の像に投影した、そのように考えることもできるだろう。

「何だか分からないけれど、ものすごく怖い」、そうした経験をした者も、これをいわゆる「怪談」として聴いてしまうと、やはりどこかに自分を安全な所に置いてしまうであろう。あるいはそうではなく、自分自身の内面の事柄として解釈するにしても、そもそもこの話を理解できるものにしてしまうことが、この話を怖いものでなくしてしまう。解釈し理解するということが、すでに怖さの体験から目を背けることを意味するからである。解釈され理解されたものはすでにもっとも怖いものではない。もっとも怖いのはもっとも怖いものを直視することである。しかし裏を返せば、怖い話を解釈し理解したということが、〈ほんとうに怖いもの〉の体験を証明していることになる。もっともはじめから「僕」の話を怖いと思わない者もいるだろう。その者はこの話を何らかの（日常的な）仕方で理解してしまっているからであるが、そうだからといってその者が〈ほんとうに怖いもの〉の体験を知らないということにはならない。むしろ我々がつねに日常的に理解しているということが、絶えず〈本当に怖いもの〉の体験から目を背けていることの証明となりうる。

「そしていつもこう思うんだ。人間にとって、自分自身以上に怖いものがこの世にあるだろうかってね。君たちはそう思わないか？」、そのように「僕」は問う。「怖さ」とは解釈以前の「怖さ」そのものの体験、あるいは〈ほんとうに怖いもの〉そのものを直視する時にもっとも怖い。そこで我々は〈ほんとうに怖いもの〉が「自分自身」であることが分かる（身が頷く）ために、自分自身の直視に向わなければならない。それは「鏡に自分自身が映るとはどういうことか」の考察を深め、説明以前の「鏡に自分自身が映る」という体験、〈鏡にただ自分自身が映る〉という体験の最内奥に到達することによってなされるであろう。

Ⅱ 鏡に自分自身が映るとはどういうことか？

我々が日常的に「鏡に自分自身が映っている」と言う時、ありのままの自分、もの、他者から成る世界がこちら側にあって、その一部が（自分を中心に）鏡に映っている、そのように見ている。こちら側が実物で、鏡の中に映っているものが虚像である。そうして我々は鏡というそれ自体こちら側の「もの」を道具として、何かの目的のために手段として用いている、そのように思っている。しかし自分自体、もの自体、他者自体、世界自体はどこまでも分からず、我々は自分と他者を役割連関、自分ともものとを道具連関のうちで押さえ、そうした連関から成る世界のうちで、現在、鏡を道具として用いているにすぎない。それゆえ我々が日常的に「鏡に自分自身が映っている」と言う時には、多くの前提を持ち込んでいるのである。ここではそうした前提をはずして、何にもない所から、「鏡」をただただ「自分自身を映す」という本質そのものにおいて考察しなければならない。その場合「自分自身」も「この僕」ではなく、「無にして有（一切）」というような全体でなければならず、「映す」ということも「見る」と同義になる。これがただただ「映す」という事態である。この「見る」における「眼」は、外を見る眼ではなく、自分自身を見る眼、内を見る眼であるが、こうした眼を動物は持たない。それゆえ動物は鏡を認識しない。また動物は（記号とは本質的に異なる）言語は持たないが、自己や他者などの言語にならない根源的な言語は理解している。これに

対し人間はみずからの本質として内なる眼を有しており、ここにおいて根源的な言語との対照のもとに具体的言語が獲得される。人間がその成長過程において、具体的な言語を獲得する以前に鏡を認識できるのもそのためであると思われる。人間がもともと「鏡」を知らなければ、人間は動物同様鏡（我々が日常目にする鏡はこの内なる眼としての「鏡」を不完全な形にしたものに他ならない）を認識しようがないし、その「鏡」において根源的な言葉を保持しているのでなければ、具体的な言語を獲得しようもないのである。

「自分自身」とは「無にして有（一切）」であり、この内なる眼が「見る」前は、「自分自身」は「無」であるが、「見る」ことによってこの底無しの無（無底）が根底となって有（一切）が生ずる（映ずる）。それによって自分自身が有ったことが顕わとなると同時に、それを見ている自分自身は隠れて再び無（無底）となる。「見る」（「鏡」に映ずる）とはこうした有と無（一切）の車輪の如き円環運動であり、この螺旋運動が「自分自身」に他ならない[2]。

この内なる眼としての「鏡」は一切をありのままに映すものとして、明境、大円境地というように、仏智の喩としても用いられてきた。さらにこうした〈一切のありのままを見ている者〉自身を映す「鏡」が、「自分自身を移す鏡」の最根源相である。この「鏡」は古来、神の自己知（自己内観照）が成立する場であると同時に、悪の根源ともされた。すなわち、被造物でありながら、この鏡（創造の根底）をのぞきこんで、神の如くになろうと自己内（地獄）に閉じ籠った天使（ルチフェル）が悪魔となり、こうした悪魔に誘惑されて、神の知を得て神の如くなりたいと思い、知恵の樹の実を食べた結果、原罪を負うことになったのが、「神の似姿」としての人間である[3]。以上は宗教的な表象に基づいたものであるが、「自分自身を映す鏡」というものをその本質において考察するならば、それが無と有（一切）の動態であり、そこからすべての存在が映し出されることによって産出されること、そしてそのもっとも根源的な相において、それを見ている自分自身をも映し出すこと、また、その全体を見、自己内に閉じ籠ることによって悪の根源となることは理解できるであろう。

それでは「僕」の体験はどうだったであろうか。まず、「僕」の体験が日常的な経験を破る〈根本経験〉であったことは容易に読み取れるだろう。人間は無目的な行動を繰り返すことによって、次第に「意識」が消滅して行く。「僕」は二年間肉体労働をしながら放浪を続け、二カ月間休まず、毎日二回の見回りを続けた。また人間を禅定に導く導入剤の役目を果たすのが繰り返しの音であり、精神の安定と集中をもたらす香である。この役目を、不規則ではあるがプールの仕切り戸の音と、蚊取線香の香りであったと考えられる。禅定が深まると、プールの仕切り戸の音が「うん、うん、いや、うん、いや、いや、いや…」というように肯定と否定を繰り返すように聞こえるようになる。これは肯定否定の分別を超えることの象徴のようにも思われる。すると「突然」、「そこに僕がいた」というように「自分自身」が現れる。「怪談」の場合には悪魔召喚の手順と思われたものが、ここでは自己本来の面目にまみえるプロセスとなっていると考えられるのである（最初の「うん、いや」が根本経験への入口で、用務員室に戻った時に聞こえた「うん、いや」が出口であろう）。

この体験において「僕」はいきなり「自分自身」の根源相を見たわけではない。そこには「自分自身」を見ることの深まりが見られる。まずは鏡が「いつの間にか新しくとりつけられていた」と考えることで、日常的な見方をする。「鏡さ。なんてことはない、そこに僕の姿が映っていただけなんだ」。そうなると「僕はほっとすると同時に馬鹿馬鹿しくなった。なんだ、くだらない」ということになる。これが第一段階である。しかし何故か「僕」はそこを立ち去ろうとはせずに、しか

---

[2] ヤーコプ・ベーメ（Jacob Böhme, 1575-1624. ドイツの神秘主義思想家）によれば神自身がそこから誕生するところのものが「無底（Ungrund）」と呼ばれ、それは「無にして一切（ein Nichts und doch Alles）」と言われる（岡村康夫『無底と戯れ――ヤーコプ・ベーメ研究』2012年、昭和堂、1頁）。ベーメはこの「無底」をしばしば「エゼキエルの車輪」に喩える（同2頁）。またこの動きを解明するものとして「無底」はさらに「眼」あるいは「鏡」に喩えられる（同8～10頁）。

[3] ベーメの場合には、こうした天使の創造とルチフェルの離反、さらには世界の創造と人祖アダムの堕落も、「無底」の根源的な動態としての「神の戯れ」のうちに捉えられることになる。

もおそらくは何の目的もなく、鏡に映った自分自身を見ながら、煙草を三回ふかす。この煙草も精神集中を高める効果があるだろう。光が窓の外から入ってきて僕の像を映し出す。さらに集中が高まる。そうして「急に奇妙なこと」に気づく。すなわち、「鏡の中の像は僕じゃない」、外見は「僕」だが、「僕がそうあるべきではない形での僕」ということに気づく。これは（当時の）ありのままの「僕」が映し出されていると考えることができる。このようなことは通常はできないことに注意しなければならない。通常は見たくない部分を誤魔化しいて、見ないようにしているからだ。これが第二段階。そしてその時さらに「相手が心の底から僕を憎んでいる」ことを理解する。これは第一に、ありのままの自分を見ている自分（根源的な自己）が映し出されていることを意味している。ここで「僕」は「自分自身」のもっとも根源的な相に到達していることが分かる。第二に、そうした根源的な自己が（こちら側の）ありのままの自分を憎んでいるということを、「僕」が「理解」しているということは、「僕」自身が、みずからの「反逆」を、「根源悪」を自覚していることが「鏡」の中の像に映っているということである。ここでも、このように自らの根源悪に向き合うということは通常なしえない、とりわけ自力では決してなしえないことに注意しなければならない。以上が第三段階。さらに「僕はそこにしばらくのあいだ呆然として立ちすくむ」。「金縛りになったみたいに動かない」のである。瞑想が深まり、日常的意識的な自己が消滅しつつあることが分かる。「奴の方が僕を支配しよう」とすること、つまり根源的な自己による支配は、神の呼び声でもあるのだが、さしあたりは日常的な自己の支配、つまりは日常的な自己を殺すこととして受け取られざるを得ない（「あなたはわたしの顔を見ることはできない。わたしを見て、なお生きている人はないからである」（出エジプト記 33-20））。日常的意識的な自己は根源的自己（神）の支配の恐怖から脱すべく、決断せざるを得ない。これが「僕」の「最後の力」をふりしぼった「うおう」とか「ぐおう」とか、そういう声であり、木刀を鏡に向って投げつけてこれを割る、という行為なのである。この決断は根源的な恐怖を前にした逃亡であり、こうした逃亡が時々刻々に行われることによって人間の日常的意識的な自己が保たれているのである。しかし、この恐怖を無意識下に抑え込み、忘却することによって、日常的意識的な自己は自らの根底に虚無と不安を抱えるようになるのである。以上が第四段階である。以上の考察によって、「僕」が「自分自身を映す鏡」の最根源相に到達していたこと、さらにはそこからどのようにして日常的意識的な自己が成立しているかを経験していたことが理解できるであろう。それではこうした根本経験を経た現在の「僕」はどのような生き方をしているであろうか。

現在の「僕」はきわめて日常的な生き方をしていると言える。放浪時代の自分の生き方を振り返って、「僕」は次のように述べる。

> そういうのが正しい生き方だと思ってた。ま、若気のいたりというかね。でも今から考えて見れば楽しい生活だったよ。それが正しかったとかまちがっていたとかじゃなくて、もう一度人生をやりなおすとしても、たぶん同じことをやっているだろうね。そういうもんだよ。

ここにはこれまでの人生に対する肯定、それもごくありきたりの自己肯定が表明されているだけで、根源悪の自覚などは微塵も見られない。また三十数歳となった現在の在り方にいついても、「（相手が素人でも、真剣を持っていたら、）今なら一目散に逃げるよ、もちろん」というように、そのまま受け入れているように見える。ただし、自分が根源的な恐怖を抱えていることは知っているようである。そのことは、当時の体験を今でも「心の底から怖い」と思っており、十年以上経っても「誰にも話したことがない」、「口に出すことさえ怖い」と思っていること、自分の家に「鏡が一枚もないこと」からうかがえる。きわめて日常的な生活をし、それを肯定しながら、根源的な自己の恐ろしさを知ることによって、その「怖れ」が「畏れ」のようなものになっていることがうかがえるのである。しかもこのことはひとり「僕」だけの事柄ではなく、「人間」の事柄だと思っているようである。それを示すのが「そしていつもこう思うんだ。人間にとって、自分自身以上に怖いものがこの世にあるだろうかってね。君たちはそう思わないか？」という問いかけである。そうして現実の鏡が一枚もない家に着目させることで、返って真実の「鏡」に聴き手を直面させ、聴き手の

各々が「自分自身」に直面し、その根源的な恐怖を体験するように促しているのである。

Ⅲ　現在の「僕」が、怖い体験談の主人としてこの話をするのはなぜか？

すでに述べたように、「僕」はこの体験を口に出すのさえ怖かった。しかしその「僕」がなぜか怖い体験談の主人として最後に自分の怖い体験談をしている。ここには「決断」がなければならない。しかしそれをこの小説の中で解明することはできない。『カンガルー日和』に収録された短編小説のほとんどすべての内容が、村上春樹が「職業としての小説家」になることに何らかの仕方で関わっており、同時に、読者がこの小説を読むことで、読者の中でどのような体験が起るかの「実験」がなされている、と言える[4]。この『鏡』という小説でも、「もっとも怖い」体験をもっとも怖い体験のままに直視し、それを言葉にする、という決断と、それを読む読者が、「もっとも怖い」体験をもっとも怖い体験のままに体験するための「実験」を行う決断、という二重の決断が透けて見えてくるが、この二重の決断こそ、村上春樹が「職業としての小説家」たらんとした決断であり、そうした決断によって『鏡』の語り手「僕」は十年以上の沈黙を破って自分の「もっとも怖い体験談」を語るべく、客を集めて、「怖い体験談」の主人となったのである。

〇楯谷:そこまで怖いというのが腑に落ちない。
〇佐野:なぜ、彼は語ったのか＝作者が作家になって行く決意と連動する
〇大藤:
〇加島:
〇岡部:
〇村上:

[4]村上春樹は「僕は一人の職業的作家として、常に読者を念頭に置いて文章を書いています。読者の存在を忘れることは――もし忘れたいと思ったところで――不可能ですし、又健全なことではありません」と述べている（『職業としての小説家』平成 28 年、新潮文庫、279～280 頁）。

「鏡」村上春樹　を読んで

2026 年 7 月 10 日

田中克典

有り体な切り口だが、「鏡とは何か？」から考え始めた。これもありきたりだが、広辞苑第 6 版では、次のように定義づけられている。「滑らかな平面における光の反射を利用して容姿や物の像などをうつし見る道具」―いわゆる道具としての「鏡」の定義である。とりあえずこのことを確認して、この物語を考えてみたい。

物語の舞台は、１９８０年代前半の主人公僕（３０代前半、１９６０年代末に高校を卒業）の自宅。そこに集う仲間が、生の世界、死の世界、予知などについての体験談を語り合っている。僕は、１９６０年代末に高校を卒業し、二年くらい放浪し、その放浪２年目の夏（僕は２０歳くらいか？）にはかなりタフに働き（肉体労働か？）、その年の秋、新潟の小さな町の中学校の夜警のアルバイトに二か月ばかり就労。そこでのある夜の体験を語ったもの。

その概要は以下の通り。いつもの夜の見回りの中で、今までその存在を見たこともない「鏡」が現れ、そこに映った「僕」の姿と対峙し、金縛り状態になり、挙句、「鏡」に向かって大声を出し、木刀を投げつけ、鏡を割った。しかし、翌朝、現場には「鏡」はなく、僕が投げつけた木刀と、僕が吸ったたばこの吸い殻だけが落ちていた。

僕がその夜、その時刻に見たものは何だったのか？再度、物語の流れを確認する。

学校の玄関付近で、突然「あれ！」って感じがした。

そこに「僕」がいた。僕は、それを新しく取り付けられた「姿見鏡」に映し出された「僕」だと思い込んだ。しかし、よく見るとその「僕」は「僕」ではない。「僕以外の僕」であり、「僕がそうあるべきではない形での僕」なのだ。

ここで、「僕」を便宜的に整理してみる。

「僕」（A）　この物語を語っている「僕」

「僕」（B）　姿見鏡に映っている「僕」

「僕（A）以外の僕」「僕（A）がそうあるべきではない形での僕」

Bは心の底からAを憎んでいる。

憎しみの程度→まっ暗な海浮かん固い氷山のような（当時は地球温暖化も顕在化していなかったことから、容易に溶けそうにない、という比喩か？）憎しみ

→誰にも癒すことのできない憎しみ

当初はAがBを見つめていた。その後、Bの手が動き始める。そして、Aも同じように動き始める。BがAを支配し始める、とAは感じ始めた。

この時点で、「鏡」の存在はゆらぎ始める、他方、Aは金縛り状態になる。

改めて考えてみる。Aがあの夜見たものは何だったのか？

有り体に言えば、Aが高校卒業前後から抱え続けていた心の葛藤の姿だったのではないか。Aの高校時代は、学園紛争の真っ只中。社会体制への反発から、大学進学を拒否し、放浪生活に入る。Aはそれを「正しい生き方」と思い、楽しいと思っていた。もう一度人生をやり直すとしても、たぶん同じことをやるだろう、と語っている。しかし、それは、今のAが当時のAの気持ちを慮って語っている言葉である。その当時のAの心裡であることを証明する術はないのである。

当時のAの生き方に周りはどう反応したのか？両親、親戚は？友人たちは？様々な反応があったろう。しかし、Aはその生き方を選んだ。それを「正しい生き方」（今のAから見れば）と思って。当時のAの心裡には、違う生き方への選択、誘惑も当然あったろう。それを選ぶことは、当時のA

には「そうあるべきではない形」だったのか？それが、Bだったのか？Bを選択しなかったAをBは心の底から憎んでいた、このAとBとの葛藤があの夜の出来事ではないか。では、「鏡」が存在しなかったとして、AはどこにBを観たのか？それは、Aの心の中にある「鏡」だったのだ。そしてそこに映し出されたBはAの「自分自身」だったとAは言っている。そして、「自分自身」以上に怖いものはない、とも言っている。

それでは、Bが「自分自身」なのか？自宅に鏡を置かないAは、「自分自身」を見ることはないのか？いや、あの夜の「鏡」は今もAの心の中には抱え続けて居る。その「鏡」で「自分自身」を観続け、何年かして、ようやく「自分自身」と折り合いをつけられるようになり、その「鏡」を観て、自分の髭を剃ることもできるようになった、ということか？

ところで、いわゆる「道具としての鏡」を自宅に置かない、それを「見ないで髭が剃れる」とはどういうことか。それは、世間一般に言われる「上手な髭剃り」ができるようになった、ということではなく、「髭剃り」について自分自身の満足だけを考えるようになった、他人を意識しなくなった、ということではないか。そもそも、自宅に道具としての鏡を置かない、ということは、客観的に自分の容姿を見る術がないということである。すなわち、他者から見てどうかということは全く捨象し、自分自身にとってどうかだけが、「上手な髭剃り」かどうかの評価基準となっている、ということではないか。それは、今の僕「A」は、その「自分自身」たる「僕B」と折り合いをつけながら生きている、自分自身たる「僕B」から憎まれることなく生きている、ということなのではないか。しかし、いつ、僕「B」から憎まれる事態になるかはわからない。それは、僕「A」が、自分自身に背理したときだ。人はいつもその危機と恐怖に隣り合わせで生きている。

人は、その人生で、幾たびも、様々な選択を迫られる。進学、就職、結婚などなど。その選択をするときは、それが最善、もしくは次善の選択だと思いながら、もしくは無理やり思いこませながら生きていく。そして、時が過ぎていく中でも、絶えずそのことは心に残る。忘れようと思っても、決して消し去ることはできない。その選択は正しかったのか、と問いかけ続けるもう一人の自分が突然現れることがある。そして、それを映し出すものとして、「心の中の鏡」が「道具としての鏡」となって立ち現れてくる。物体として存在する「道具としての鏡」は、そのような二面性を持つ「存在」としてここでは描かれている。そして、「道具としての鏡」が「心の中の鏡」に昇華させられた時、人は、「道具としての鏡」を持つことをやめる。そこに自分自身を映しこむ必要がなくなるからである。「道具としての鏡」に映し出されるものは、自分自身以上に大切なものではなくなるからである。人にとって、自分自身以上のものを見つめる必要はないからである。

この小説は、人間が抱え続けるこのような心の葛藤を描いたのではないか。

以上

〇楯谷：そこまで怖いというのが腑に落ちない。
〇佐野：なぜ、彼は語ったのか＝作者が作家になって行く決意と連動する

表現されるモノによって表現する者が支配される。シャーマン。巫女さん＝表現する者が規定され、支配される。映し出すものと映し出される者の関係をどう考えるか。語る者（言葉）がなければ語られる者（意味）もない。

【山口西田読書会】

村上春樹「鏡」レポート

関西大学大学院文学研究科D３

加藤　千佳

本作における「語り」は、作品内でも位置付けられているように、広義での「怪談」である。また、最後の「オチ」を踏まえると、作品内での位置づけ以上に「怪談」としての性格が強いようにも思われる。しかし、本作の核心は「鏡に映る自己を見る」という体験にあり、この行為自体は我々が日常的に行うごくありふれたものである。

しかし同時に、「鏡に映る自己を見る」という体験を恐ろしいと感じたことがある人は、決して少なくないだろう。私自身、幼少期からクラシックバレエを習っていたため、多くの鏡に囲まれた空間には慣れ親しんできた。教室もそうだし、舞台もそうだ。とりわけ暗い舞台袖に置かれた鏡には、何度かぞっとさせられた記憶がある。鏡に何かが映ったと気づいた瞬間、コンマ一秒後にはそれが「自分」であると理解する。しかし、その認識に至るまでのわずかな時間、「それ」は紛れもなく他者として現れる。そして、その存在が自分自身であると気づく瞬間には、言いようのない奇怪な感覚が伴うのである。

本作は、その一瞬で終わるはずの恐怖を、長い時間に引き延ばして描いた物語である。そのため、この「恐怖」の本質を解き明かすことが、本作品を読解する上で重要な意義を持つ。

この「恐怖」の根源は、そこに映っているものが間違いなく自己であるにもかかわらず、それを即座に自己として引き受けることができない点にある。それはなぜか。そこに現れるのは、単なる自己ではなく、「自己の中の内なる他者」だからである。ここでは、この存在を仮に「内なる他者」と呼ぶことにしたい。それは自己でありながら自己ではなく、私たちが普段「これが自分だ」と考えている統一的な自己像には収まりきらない存在である。

しかも、その存在は「他者」である以上、「自己」と対立する。しかし同時に、それは自己の外部にいる他者ではなく、「内なる他者」であるがゆえに、自己を問い、自己そのものを根底から変容させようとする存在でもある。そのことは、「やがて奴の方の手が動き出した。右手の指先がゆっくりと顎に触れ、それから少しずつ、まるで虫みたいに顔を這いあがっていた。気がつくと僕も同じことをしていた」という場面に端的に示されている。本来であれば現実の自己が鏡像を支配するはずである。しかしここでは、鏡像が先に動き、それに現実の自己が従うという逆転が起きている。主人公が恐れたのは、自らのうちに潜む「内なる他者」が、自分自身を支配し始めたことにほかならない。

この「内なる他者」が具体的に何を意味するのかは、作品の読み方によって異なるだろう。例えば、高校で『鏡』の指導法について論じたあるブログ[5]では、現在の自分、すなわち「楽な夜警という仕事を選んでのんびりしている自分」を、「学生闘争に本気で向き合うべきだと考える自分」が糾弾する構図として解釈している。この読解も、政治的な思想信条から、あえて過酷な肉体労働で汗を流す道を選びつつも、「少しのんびりしたかった」ために夜警の仕事を選んだという当時の語り手の身の上を踏まえるならば、十分に納得できるものである。

しかし、本作の主題は、それだけに限定されるものではないだろう。内なる他者は、学生闘争という歴史的経験に由来する一つの人格ではなく、人間が自己の内部に抱え込む普遍的な他者性そのものを象徴していると考えられる。だからこそ主人公は、十年以上が経過した現在においても鏡を見ることができないのである。鏡に映るのは単なる現在の自分ではない。いついかなる時も、自ら

---

5 「村上春樹『鏡』のあらすじ&テスト問題解説、意味調べノート」（国語力アップ.com、最終閲覧日：2026年7月11日、https://kokugoryokuup.com/murakami-kagami/）

を根底から問い直し、変容を迫る「内なる他者」が、そこには映ってしまうからである。
　さらに言えば、主人公が恐怖したのは、自己の内部に他者が存在するという事実だけではない。その「他者」が、自分自身と切り離すことのできない存在であり、自己と他者との境界そのものが揺らいでしまうことである。鏡の中の存在は決して外部から侵入した怪異ではなく、自己の内部から現れた存在であり、その限りで間違いなく「自分自身」なのである。「人間にとって、自分自身以上に怖いものがこの世にあるだろうか」という最後の問いかけは、その恐怖を表したものであると考えられる。

〇楯谷:そこまで怖いというのが腑に落ちない。
〇佐野:なぜ、彼は語ったのか＝作者が作家になって行く決意と連動する
〇大藤:
〇加島:
〇岡部:
〇村上:

鏡を割れなかったばっかりに……

大藤　涉

さっきからずっと皆さんのレポートを読んでいても、僕には何もわからない。どういったタイプの話しなのかわからないし、どんなパターンで話しが展開されているのかもよくわからない。もはや、自分が生の世界にいるのかどうかもわからない。もしかしたら、とっくのとうに幽霊になってしまっていて死の世界にいるのかもしれない。そんなことを考えてしまうのは、そもそも常識を超えるどころか、常識をもちあわせることさえできなくなってしまったからだろうか。

それで、何もかもがごちゃごちゃしてしまって、何もわからないということすら、よくわからなくってくるような気がする。つまり、よくわからないということを経験している気さえなくなってくる。個人的な傾向があるのかないのかもよくわからない。集合的な傾向には従っていた気がするけれども。今では、そもそもそういう風にどこかに傾くということがなくなってしまって、方向を見失い、たださまよっているみたいだ。

そうすると、もちろん何の分野にも適さず、所属しないことになってくる。自らの居場所はないし、誰からも顧みられることはない。意思疎通とか褒められるとか、そういうことを経験することもない。二人の人と一緒にエレベーターに乗っていて、彼らが談笑していながら、僕の耳にはまったく入らないということもある。僕は一人きりだった。防犯カメラから見ている人がいれば、三人だったかもしれないけど、それにしても僕が一人であったことに変わりはない。あるいはむしろ、僕は一人以前であった。

とにかくそうだ。僕という生き物は、人間以前の何かだろうし、無能力しかもっていない。なんというか、実に蒙昧な生だ。

でも僕は一瞬、ほんの一瞬から、人生の歯車が狂った。もう 10 年くらい前の話なんだけど、これまで誰にも話したことはない。思い出すことさえできなかった。思い出すと、何もわからないということすらよくわからなくなっている、この感じさえもが狂ってしまう気がして、だからずっと意識しないようにしていた。でも今回は皆さんが順番にそれぞれ『鏡』のレポートを書いてくれているわけだし、参加者である僕が何も書かずにいるというわけにもいかない。それで、僕も思い切って書いてみることにする。

もし仮に書けたとしても、そんなたいした話ではない。上にも書いたように分かり合うことはできないし、書く能力をもちあわせてもいない。思い出すうちに記憶が歪んできて、なんだということになってしまうかもしれない。もしそうなってしまったら、それはそれでいい。とにかく書いてみよう。

僕が高校を出たのはずっと前のことだったように思えるし、昨日のことだったようにも感じる。なにかといえば現状維持という時代だった。僕もまたそういう波に呑み込まれていた一人で、大学に進むことを選んで、何年後かには小学校の教員をしながら地元で過ごすつもりだった。そういうのが正しい生き方だと思っていた。自分なりの人生設計というか、そうやって生きるものだと決め込んでいたいうか。でも今から考えてみれば幸せな生活になっていただろうと思う。それが正しいとか間違っていたとかじゃなくて、もう一度人生やりなおすとしたら、迷わず同じ夢を見続けるべきだと思うし、同じ夢を見続けるかぎりで迷うべきだと思う。幸せな人生というのはそういうものだ。

大学二年目の春に、僕は一ヶ月ばかり留学に行った。南太平洋に位置する島国だ。僕はちょうど冬のあいだかなり環境に馴染んできたせいで、少し何か新しいものに触れなければならないと思った。なにしろ留学というのは未知のものに溢れているようにみえた。でも、それまで日本の外に出たことはなかったし、出たいと思ったこともなかった。何なら、今でも自ら出ようと思うことはない。海を渡って、はじめは色々なことに驚いていたけど、過ごしているうちに体に馴染

んできた。平日は学校に行って勉強して、それ以外は町で買い物をしたり、海を眺めたり、家でみんなでお話したりしていた。夜に家族みんなで話すというのは悪くなかった。18、19 の頃なんて言葉が通じなくても何となく意志疎通できてしまうものだ。

帰国間近になると、日本のニュースがこっちにも流れてきた。皆さんも知っているそのニュースを一応説明しておくと、ある大型クルーズ船で集団感染が発生したというものだった。はじめは大したことにはならないだろうと思っていた。さらにいうと、海の向こうの遠い国の出来事のように見えていた。すぐに何事もなく日常を取り戻すだろうと決めてかかっていた。でも、こちらでも少しずつ偏見が広まってきた。やがて帰国すると、これまで知っていた世界とは別の世界が広がっていた。

その世界では新しい生活様式が求められていて、出歩くときはいつもマスクを着け、他の人とは一定の距離を空けなければならない。もちろんマスクなしで外を歩くこともできるし、みんなと話すこともできる。でもそんなことはできるだけ避けた。というのはマスクを着けることはたいした手間ではないし、それにもし感染してしまったりしたら、迷惑するのはみんなだからだ。

気がついたら、みんなは新しい生活様式に馴染んでいた。もちろん、みんながみんな馴染むわけではない。でも、目に見えないウイルスが相手なら、たとえマスクを着けていてもとても怖かった。その頃は。今なら熱中症になることの方をもちろん気にかける。

それは９月の初めの熱帯夜だった。もう秋だというのにとても暑かった。その夜は、とりわけ寝つきが悪くて、眠れなかった。でもそれはむし暑さだけが原因ではない。ちょうど頭の中がぐちゃぐちゃになっていて、前提を問え、考えることから逃げるなと何ものかが呼びかけてきた。鎮めようと思ったんだけど、声が多すぎて鎮めようもなかった。それで一晩中ぐわんぐわんしていた。

11 時に考えていた時にはまだ意識がはっきりしていた。問いは明確だったし、何もかもよくわからないことだけは理解できていた。導き出す解答は変わり続けていた。僕は暗闇の中で、ただ降りかかってくるくる問いに応えていた。

2時を過ぎた頃、なんだかすごく変な気に襲われた。うまく説明できないけれども、実に変な気分だった。具体的に言うと、眩暈がするわけだ。僕は無意識にまで意識を張り巡らせようとするから、いつもはそんなことあり得ない。それで、無理に起きあがって、台所にいった。あいかわらず色んな声が呼びかけてきて頭がぐわんぐわんしていた。しかし、その声が何かしらさっきとは違うような気がする。気のせいと言われればそれまでだけど、声を声として意識することができない。嫌だな、考えたくないな、と思った。でもそれは意志とは関係なく勝手に入り込んできた。まるで思考の内に不法侵入されているようだった。頭の中で僕は両手で包丁を持って台所に立っていた。

嫌な夜だった。暑さはますます厳しくなって、空気はますます湿っぽくなっていた。肌がぴりぴりして、意識が朦朧とする。普通は、白い紙の上に絵を描く。絵は白い紙において浮かび上がる。目に見えるのは絵で、白い紙はあくまで背景にすぎない。際立たないものに対して自らの方が際立つように、絵は紙から際立つ。しかし絵はその紙を自らとともに引きずってゆかざるをえない。際立つものは、自らから際立ちえない何ものかとともになければ自らを際立たせることはできない。対して、際立たないものは、自らと縁を絶って自立したかのような際立つものと縁を結び続ける。でも、何かよくわからないものとの出会いを契機に、その背景であったはずの紙、つまり白が浮かび上がってくる。すると、絵は崩壊する。背景を失った絵は、もはや絵ではなくなる。背景が浮き出てくると、絵の縁はぼやけて曖昧になり、形は散乱する。何が図で、何が背景かわからなくなってくる。浮き出る背景はもはや背景として退くままにはならず、表面に出てくる。すると、意識的な知覚は、背景という白のなかで崩れる。というのも、意識的な知覚は、それを成り立たせる多数多様な無意識的な知覚がなければ生じないからだ。浮き出る背景において、意識的な知覚も意識する意識も、無意識的な知覚のなかで混じり合ってしまう。意識が遠のくにつれて、白い闇の中で何かの姿が見えたような気がした。そのとき、これまで感じたことが

なかったけれども、感じざるをえない何かを感じた。僕は包丁を握りなおして、その何かを待ち構えた。そして、気がついたら包丁の刃先は自分自身に向いていた。

到来したのは僕だった。つまり―鏡だ。僕の姿を映す〈僕〉がいた。昨日の夜まではそんなところに〈僕〉なんて見えなかったけれども、〈僕〉はずっと前からそこにいた。それで僕は驚いた。僕だけではなく、僕が僕になることを成り立たせている世界それ自体をも映し出す鏡だった。僕は眩暈がすると同時に混沌とした宇宙に迷い込んだ感覚に襲われた。なんだこれは、と思った。それで鏡に映されたまま立ち尽くした。包丁を下ろすこともできなかった。そして鏡に映された僕と、鏡を見る僕が分裂していった。下の階の窓からは様々な物が出たり入ったりしていた。でも、僕がいる上の階には窓がなくて何も入ってこなかった。下の階からはどたどたと足音が聞こえた。

包丁の切っ先がこちらを向いている時、それは、何時間もそうしているような気がするし、一瞬だったような気もする。とにもかくにも、気がついたら、鏡の中の〈僕〉は、刃で僕を刺していた。いや、違う。正確にいえば僕が僕を刺していた。でも倒れたのは僕以外の僕だった。そこに横たわったのは僕がそうあるべきである形での僕だった。

うまく言葉にはできないし、この感じを他人に言葉で説明するのはとても難しい。そもそも他人と分かり合うことを目的にすること自体がどこか間違っている。

でもその時ただひとつ僕に理解できたことは、僕が僕ではない何かになったということだった。まるで海鳴りという大きな塊が、一つひとつの波の微細な飛沫に溶け込んでいったような感じだった。僕が僕として生きるためのシステムが故障して、これまで僕を成り立たせてきた世界の方が浮かび上がってきた。僕の思考は眠りについてしまった。でも、その代わりに〈僕〉の思考が起き上がってきた。

僕はしばらくのあいだ呆然として横たわっていた。包丁が床の上に転がっていた。〈僕〉は横たわる僕を映し出していた。このとき僕は気づいた。鏡は、この世界を単に映し出すわけではなかった。むしろ、僕がいることによって、光は屈折し、鏡に映し出される世界は歪んでいた。つまり、〈僕〉という鏡が映し出す世界を、もう一度僕が見ていたのだ。つまり鏡は二重だった。でも、鏡は一枚、割れてしまった。

僕はその時、最後の力をふりしぼって意識をはっきりさせようとした。曖昧で雑然とした知覚から明晰判明な知覚をつくりだそうとした。でも、一度割れた鏡は、二度と同じように映し出すことができない。形あるものはすべて壊れる。壊れたものはもう元には戻らない。僕にはもはや何の音も聞こえなかったし、何も感じることができなくなった。

こういう話の結末は、死に直面するまでわからない。もちろん死を迎えてもわからないかもしれない。

僕は〈僕〉に乗っ取られてしまった。僕は〈僕〉にやり返そうとするけれども、〈僕〉の方には形がない。だから、僕には闘いようがない。でも正確にいうと、はじめから僕なんていなかった。もともとなかったのは僕の方だった。僕が僕としてあり続けることも、世界にあるべき形があるということも、すべてそう思い込んでいただけだった。けれども、僕を映し出す〈僕〉がいなくなったことなんて一度もなかったんだ。そういうことだ。

というわけで、〈僕〉は僕を壊してしまった。あの時から、〈僕〉において世界が映し出されるようになった。人間としての僕が何かを感じたり、出来事を経験したりするのではなく、世界そのものや、出来事それ自体が〈僕〉において生じるようになった。つまり、僕が世界に向きあうのではなく、〈僕〉がその都度、世界あるいは出来事に「なる」ようになった。こうして、〈僕〉は、僕を映し出すための鏡ではなく、世界を浮かび上がらせる単なる鏡、いわば内も外もなく、むしろ内と外をつくりだす一種の環境のような関係的な場になった。

人間にとってほんとうに怖いのは、経験的につくられてきた自分が自分ではなくなって、自分であることが問題にならなくなることだと思う。でも、人間としての自分がどうでもよいものになることで、はじめて自分自身に還っていくのだと思う。もちろん、もとからそこへの道は開か

れているし、すでにつねにあらゆるものは、そこにおかれている。けれども、その道は、人間としての自分にこだわっているかぎり見えない。人間にとってのこだわりを捨てれば、否定的なものはなくなり、すべては成るがままに映し出される。そこには、現実と想像の区別も、本物と偽物の区別もない。そこでは、あらゆるものが分裂し、分岐し、バラバラになっていくが、それらすべてが他のあらゆるものと関係を結ぶことができ、その結果および効果はすべて肯定されると同時に生じる。そこにおいて映し出される世界は、それ自体一つであると同時に多数多様である。とにもかくにも、すべては〈僕〉という一枚の鏡において生じる。人間にとって、これほど不可思議なことがあるだろうか。

それにしても、〈僕〉を浮き出たせ、僕という形を崩壊させたのは、一体何だったのだろうか。なぜ僕は壊れてしまったのだろうか。今となってはよくわからないけれども、それはおそらく僕が僕自身に対して恥の感情を抱いていたからだ。それははっきり意識されることはなかったけれど、無意識のうちに感じていたものだった。それを呼び起こす契機となったのは、あの声だ。自分がそのままでいることが許されないような暴力的な問いを投げかけてくる無数の声。あの声が僕の意識に紛れ込んでしまったせいで、それまで自らの恥の部分を意識しないようにさせていた無意識のメカニズムがすっかり故障してしまった。恥の感情が意識的な知覚になると、それをつくりだしていた無意識のメカニズムも崩れはじめる。そうすると、意識的な知覚と無意識的な知覚が明確な関係を維持することができなくなり、僕という形が崩壊した、そして、背景であった〈僕〉が浮かび上がってきた。

ところで、なぜこんな風に書くことができるのか、どう説明したらよいだろう。結局、書いているのは、〈僕〉ではなくて僕なんじゃないか。そうだとしたら、もう一度、そして何度でも僕という鏡は割られなければならない。自分という形を崩壊させることには、嫌悪と痛みを伴う。というのも、この世で一番見たくないものは、何かに執着してしまう自分の醜さだからだ。でも、その執着を捨てれば、背景に退いていた〈僕〉が浮かび上がってくる。〈僕〉は僕を壊し捨てる、すると、〈僕〉において、僕ではなく、世界そのものが浮かび上がってくる。〈僕〉は、僕が見たいものを壊し続ける、そして、その後に浮かび上がってくるであろう〈これ〉を信じる。

〇楯谷:そこまで怖いというのが腑に落ちない。
〇佐野:なぜ、彼は語ったのか＝作者が作家になって行く決意と連動する
〇大藤:自分が自分であり続けるが問題にならなくなる＝怖いこと
〈僕〉は自分が自分であり続けることを否定して来る。自己同一的であれ！　自己同一的であるな！

「私自身」と向き合うとは

加島　里奈

私は一人になることがとても怖い。一日中一人になるかもしれないと思うと、気が気ではいられなくなる。できるだけ予定を入れたり誰かといる時間をつくるようにしたりしてしまう。大学生時代、友人にこの悩みを打ち明けた際、「だからあなたは考えることができないのだ。」と批判をされた。当時、なんてひどいことを言うのだ、と少々腹がたったのと同時に、不思議と納得できてしまった。

村上春樹の『鏡』を読んだとき、ふとそれを思い出した。「人間にとって、自分自身以上に怖いものがこの世にあるだろうかってね。」という主人公の言葉に共感できたからである。

〈僕〉を取り巻く状況

この小説は、主人公である〈僕〉が人生でたった一度だけ経験した、心の底から怖かった話を語ることによって物語が進んでいく。

〈僕〉は１９６０年代、体制打破という時代に高校を出て、大学に進むことを拒否し肉体労働をしながら日本中をさまよっていた。〈僕〉自身、そのような時代の「波にのまれた」。そして、そのような生き方を「正しい生き方」だと思っていたのである。今から考えても、それが、正しいとか間違っていたとかではなく、同じことをやっていただろうと振り返る。

そんな〈僕〉は、放浪２年目の秋に、アルバイトとして２か月ばかり中学校の夜警をしていた。夜警を選んだ理由は、「少しのんびり」したくて、「夜警は楽」だったからである。

〈僕〉が経験した恐怖体験

〈僕〉は９時と３時に学校を回る。９時に見回った時には、何も起こらなかった。〈僕〉は３時に目覚まし時計を合わせぐっすり眠った。しかし、３時のベルが鳴った時、すごく嫌な気分がした。「体が起きようとする僕の意志を押しとどめるような」感じであったという。無理に起き上がって見回りを続けようとするが、仕切り戸の音や風の感じ方、空気が先ほどとは全く異なるように思えたと語る。

それでも校舎の中に異常はなく、最後のチェックポイントである給食室の横のボイラールームだけになった。〈僕〉はいつも通り１階の長い廊下を歩いて用務室に戻ることにした。その夜はいつもより急ぎ足で廊下を歩いた。その廊下のまん中あたりを通りすぎた時、突然、「あれ！」って感じがした。暗闇の中で何かの姿が見えたような気がしたからだ。懐中電灯の光を投げかけると、そこには、鏡に映っていた僕がいたのである。はじめ鏡に映った僕を見た時、〈僕〉はほっとして馬鹿馬鹿しくなっていた。くだらないとも思っていた。

しかし、３回くらい煙草をふかした後に、急に変なことに気づいた。鏡の中の像は〈僕〉ではなかった。外見は〈僕〉であるが、でも絶対に〈僕〉ではない。「正確に言えば僕」だけど、「それは僕以外の僕」だった。それは、「それは僕がそうあるべきではない形での僕」であった。そして、鏡の中の像の僕は、「心の底から僕を憎んでいる」と〈僕〉は理解できた。それは、「まるでまっ暗な海に浮かんだ固い氷山のような憎しみ」であり、「誰にも癒すことのできない憎しみ」だった。僕には「それだけを理解することができた」。

〈僕〉はしばらくのあいだ呆然として立ちすくんでいた。金縛りのようになり動けなかった。すると、鏡の中の僕の手が動き始めた。気が付くと〈僕〉も鏡の中の像と同じ動作をしていた。それは「まるで僕の方が鏡の中の像であるみたい」に。「つまり奴の方が僕を支配しようとしていた」のだ。

恐怖体験を経験した後の〈僕〉

〈僕〉は、朝になって鏡なんてなかったことに気づく。それは、鏡に映った僕ではなく、「ただの僕自身」であったという。このような体験を十年以上たった今も「いまだに忘れることができないでいる」のだ。そしていつも「人間にとって、自分自身以上に怖いものがこの世にあるだろうか」と思うようになった。さらに、現在も家に鏡がなく、鏡を見ずとも髭がそれるようになった、と語る。

どれが本当の〈僕〉なのか

この小説をめぐって議論していく中で、鏡の中にいる僕の方が本来の僕で、現実世界に生きている〈僕〉の方が虚像なのではないかと考えるようになった。それは、学生時代の〈僕〉が、本当に考えて行為をしていたようには思えなかったからである。例えば、〈僕〉は「体制打破」という時代の波に「呑み込まれていた」と語る場面や、〈僕〉が大学に行かなかった理由は、「肉体労働をしながら日本中をさまよう」ことが「正しい生き方だと思っていた」と語る場面である。〈僕〉の語り方は、自分が「したい」「しなければならない」というよりも、「～させられていた」というように客体的であり、どこかそうあるべきだという像を演じているかのようである。そのような〈僕〉は、何かしらの〈良い〉と思われる前提に乗って行為をしたり思考をしたりしているように見える。

「僕がそうあるべきではない」鏡の中の僕に出会ったときの〈僕〉は、何かの目的や前提において鏡を見たわけではない。それは、そこを通り過ぎた時に「突然『あれっ！』って感じ」で目に入ったのである。そのような鏡の中の僕は、前提だらけの〈僕〉に対して、「本当にそれでいいのか。」と問うているようである。前提のない僕に問われてしまった〈僕〉は、前提が問われてしまったために、自分が自分ではいられなくなってしまう恐怖にさいなまれたのではないだろうか。

「私自身」と向き合うことの恐怖

鏡の中の僕に「それでいいのか」と問われてしまった〈僕〉は、鏡を木刀でたたき割りそこから逃げる。そして、それからの人生においても鏡を見ることができなくなってしまう。それは、「私自身」と向き合うことをあきらめ、虚像の私として生きることを決めたかのようである。

では、私はどうであろうか。私は、「私自身」と向き合うことができているのだろうか。そもそも、人は何かの前提に乗ることで思考できる。言葉や文字などの前提がなければ、何かを話したり書いたりすることもできないだろう。しかし、前提に乗って考えることは、「私自身」が考えているといえるのだろうか。そこから逃げずに考え続けることが「私自身」と向き合うことではないか、とこの小説は問うているのではないだろうか。

冒頭で述べた、「だからあなたは考えることができないのだ」という友人の発言に戻る。この批判を聞いた当初、そんなはずはないと思った。一人で何かの本を読んで物事を考えたり、物事に関して思想にふけったりすることが好きな方だと思っていたからだ。しかし、ふとひとりになるときがどうしようもなく怖い。それは、本を読み終わったときや、ふらっと歩いているとき、ぼうっと車を運転しているときなどである。そのような時、「本当にそれでいいのか。」という声が聞こえ、自身が問われてしまう。そのような声に、どう応答してよいか分からず、当てもなく考え続けてしまう。考え続けても答えなど出るはずもなく、考えれば考えるほどどうしてよいか分からなくなってしまう。

この小説からこの出来事を考えるならば、私が一人で本や思想に耽っているときは、誰かと共にあり、誰かの前提に乗って考えているのであって、「私自身」が考えていないのかもしれない。もっと言えば、私は誰かの前提の上に乗って、考えた気になっていただけなのかもしれない。そして、そのような瞬間をかいくぐり、ふと誰とも共にいない本当のひとりになったとき、「私自身」が問われてしまう。そこまで考えても終わりがなく、応答することができないことがどうしようもなく怖いのかもしれない。

だからと言って、鏡を割らずに、保持し続ける生き方がどのようなものであるのか、今の私には

想像することができない。鏡を割ってしまい、永遠に虚像を生きる〈僕〉のように、私も「それでいいのか」という声に応答することなく、その場その場をやりすごしている。私は、「私自身」と向き合うことなく、鏡を割り続けているのかもしれない。

〇楯谷:そこまで怖いというのが腑に落ちない。
〇佐野:なぜ、彼は語ったのか＝作者が作家になって行く決意と連動する
〇大藤:自分が自分であり続けるが問題にならなくなる＝怖いこと
　〈僕〉は自分が自分であり続けることを否定して来る。自己同一的であれ！　自己同一的であるな！
〇加島:鏡の中の僕は、前提だらけの〈僕〉に対して、「本当にそれでいいのか。」と問うている

2026年7月7日

わたしを見るわたしは自由か

岡部　昌平

構造の例示

1990年に入ったばかりのころ、急速に増えていったコンビニの雑誌コーナーの一角にコンビニ専用の文庫というのが並んだことがある。ちょっとした小噺を数本、資料もなにもなく即興で書かされる仕事で、ちょうどこの時期になると必ず「こわい話」の企画が持ちあがる。

作家は冒頭で「こわい話」にありがちな構造を2つ示して、自分はいずれにも属していないと否定しながら、もろにその上に展開している。「でも僕にも一度だけ」とおきまりの導入ではじまり、その後も古典的な「こわい話」のスタイルをなぞる。「この家に鏡が一枚もないことに気づいたかな」と臨場感を高めることもわすれない。「眠い」とおなじ様式のパロディになっている。

恐怖はどこにあるのか1

鏡に見えた自分は自分に敵意を持っているが怖いのはその「敵意」だろうか。相対化した自分（の影）が、あたかも意志を持っているように自分を否定している。二人の自分――なにか心の問題が暗示されているようだが、どちらの自分が「本当の自分」であるか問題を掘り下げるだけの材料は与えられていない。

恐怖はどこにあるのか2

こころみに「敵意」を「好意」に交換してみる。時間も空間もそのままに、はじめは鏡の像だと思っていた鏡の自分が、しだいに自分に親しげな表情を見せるストーリーを想像してみると、そのほうがよほど怖くはないか？

こんな話も考えられる。主人公が親しい友人とたのしく会話している。他愛もない会話を続けていると、友人が自分しか知り得ない秘密、胸に秘めていた秘密を語りはじめる……でも恐怖を描けるだろう。鏡像の「敵意」を持たせる意味はあまりない。

恐怖はどこにあるのか3

もうひとつ恐怖のポイントがあるので試してみたい。友人とたのしく話している場面をもういちど想像してほしい。

いつも顔を合わせている友人がいて、いつものように楽しい会話をしている。その友人が会話のあるところから自分への恋心を切々と語りはじめたらどうだろう。ちっとも怖くない？　たしかにそれが開放的な公園や賑やかなカフェであったなら単なる告白シーンにすぎない。でも、その場が2人きりで深夜だとしたら、あまい愛の言葉がホラーになるのでは？

自分がいちばん怖い

ここで「こわい話」の様式を講釈したいわけではない。鏡に映った自分の敵意が問題ではなく、まして夜中の3時や音をたてる戸などは古典的な仕掛けにすぎない。ここでの恐怖は「自分を見ている」ものがあることから生まれている。

わたしたちはあたりまえのように自分を意識する。問いかけるわけでもなく自分を意識し、自分を見つめて生きている。かつては神や仏のまえに立っていたのかもしれない。でも、いまそんな人はほとんどいないだろう。ペトラルカからずっと？　否、そんなこともわすれて無意味に自由に「自分」を見ている。

そんなわたしたちは自由だろうか。自由ならどうして自分を怖がるのか。そんな問いがこの小説のように思える。

〇楯谷:そこまで怖いというのが腑に落ちない。
〇佐野:なぜ、彼は語ったのか＝作者が作家になって行く決意と連動する
〇大藤:自分が自分であり続けるが問題にならなくなる＝怖いこと
　〈僕〉は自分が自分であり続けることを否定して来る。自己同一的であれ！　自己同一的であるな！
〇加島:鏡の中の僕は、前提だらけの〈僕〉に対して、「本当にそれでいいのか。」と問うている。
〇岡部:当たり前のように自分を意識することが病気だ。自分が立ち上がる前を問題にしたい。

人は自己同一性をどのように超えるのか

――村上春樹「鏡」を読む――

村上　林造

「鏡」は、僕が鏡に映ったもう一人の自分と出会う話である。僕にとってそれは十年以上ものあいだ「口に出すことさえ」できなかったほど怖い経験であった。僕は「あの夜味わった恐怖だけはいまだに忘れることができない」、「人間にとって、自分自身以上に怖いものがこの世にあるだろうか」と語り、今も「鏡が一枚もない」家に住んでいることを明かして、語りを終える。僕の恐怖は十年以上を経た今もなお鏡に映った自分の姿を見ることに耐えられないほど大きいのだが、僕はその恐怖体験を今ここで語ろうとするのである。では、「僕自身」を鏡の中に見る事がなぜそれほど怖いのか、それを今僕が語るということにはどんな意味が込められているのか、本稿ではこれらの問題について考えてみたい。

Ⅰ 「鏡に映った僕」との遭遇と対面

それは、中学校の夜警として校舎を歩いている時の出来事であった。「暗闇の中で何かの姿が見えたような気がした」ので、「そちらにぱっと懐中電灯の光を投げかけた」ところ、「そこには僕がいた」。僕は煙草を吸いながら「鏡に映った僕の姿」を眺めたのだが、その時僕は「急に奇妙なことに気づ」く。それは次のようなことである。

①つまり、鏡の中の像は僕じゃないんだ。
②いや、外見はすっかり僕なんだよ。それは間違いないんだ。
③でも、それは絶対に僕じゃないんだ。僕にはそれが本能的にわかったんだ。
④いや、違うな、正確に言えばそれはもちろん僕なんだ。でもそれは僕以外の僕なんだ。それは僕がそうあるべきではない形での僕なんだ。（〇付数字、棒線、分かち書きは引用者）

僕は何度も言葉を繰り返していく。①～③では、「それは僕なんだ」、「それは僕じゃないんだ」と語り、語る後からすぐ前言を撤回し、修正する。そして④に至ってようやく「それ」は「僕以外の僕」であり、「僕がそうあるべきではない形での僕」だという結論に到達するのだが、それで終わったのかと言えばそうではない。その後でさらに僕は次のように言うからである。

⑤うまく言えないね。この感じを他人に言葉で説明するのはすごく難しいよ。

ここでの僕は「それは〇〇だ」という結論への到達をめざしているように見えて、実は逆に「それは何なのかうまく言えない」ということ、つまりその「語れなさ」こそを語っているように思われる。だとすれば、十年以上の期間を経て、僕がようやく口に出すことができたのは「それは〇〇だ」ということではなく、むしろそれは「語ることができない」ということだったことになる。しかし、「それは〇〇だ」と語ることができないとはどういうことなのだろうか。

そもそも鏡とは何か。一般的にいえば、それは「私はここにいる」「ここにいるのは私だ」ということを確認することで、「私は私である」という自己同一性を保証してくれる装置である。しかしこの場合、「鏡の中の私」は確かに「鏡を見ている私」から生まれた存在でありながら、それは「鏡を見ている私」とは決して一致しない何かであり、その時「私」は安定した一つの実体ではなくなっている。ここで、僕は「私は私である」という自己同一性の危機に直面させられているのである。

しかし、僕と「もう一人の僕」の乖離、分裂を「目で見る」とはどういうことなのか。確かに人

はそのことを頭で考え、観念として表象することはできる。だが、そのことを人は「見る」ことができるのか。すくなくともそれは、リンゴを見たり自動車を見たりするような仕方で、視覚的に把握されることではないだろう。だいいち、もしそれが目で見ることができるモノ（物体）であれば、僕はあれほど懸命にその「語れなさ」を語る必要もなかったはずではないか。現に僕は②「いや、外見はすっかり僕なんだよ。それは間違いないんだ」と言いながら、他方で③「でも、それは絶対に僕じゃないんだ。僕にはそれが本能的にわかったんだ」と言っている。眼に見える「外見はすっかり僕」でありながら、それが「絶対に僕じゃない」ことが「本能的」に分かったと言うのである。問題は、視覚的表象（「外見」）と直観（「本能」）の間に生じたずれと乖離なのであって、そのことを明確に示すのが、次のような僕の「理解」である。

> でもその時ただひとつ僕に理解できたことは、相手が心の底から僕を憎んでいるってことだった。まるでまっ暗な海に浮かんだ固い氷山のような憎しみだった。誰にも癒すことのできない憎しみだった。僕にはそれだけを理解することができた。

僕は、「相手が心の底から僕を憎んでいる」ことの絶対性を「理解」したのだが、その理解は単に視覚的表象の上に成り立っているのではなく、むしろ視覚的表象を裏切り、背馳する何かを感じたことによる。そのようにして僕に到来した「憎しみ」について、我々はどう考えればよいのか。

それを考えるには、僕が当時どのような考え方や感じ方をし、どのように生きていたのかを見る必要があろう。それについて、次に検討してみたい。

Ⅱ　当時の僕の自己同一的な生き方

僕は当時の自分の生き方について次のように語っている。

> 僕が高校を出たのは六〇年代末の例の一連の紛争の頃でね、なにかといえば体制打破という時代だった。僕は、そんな波に呑みこまれた一人で、大学に進むことを拒否して、何年間か肉体労働をしながら日本中をさまよってたんだ。そういうのが正しい生き方だと思ってた。ま、若気のいたりというかね。でも今から考えてみれば楽しい生活だったよ。それが正しかったとか間違っていたとかじゃなくて、もう一度人生をやりなおすとしても、たぶん同じことをやっているだろうね。そういうもんだよ。
>
> （略）
>
> 放浪の二年めの秋に、僕は二ヵ月ばかり中学校の夜警をやった。（略）夜中に学校で一人きりというのは悪くなかったね。いや、ちっとも怖くなんてないさ。だって十八、十九の頃なんてまったく怖いもの知らずだもんね。
>
> （略）
>
> 九時と三時に僕は大型の懐中電灯と木刀を持って学校をまわる。左手に懐中電灯、右手に木刀だよ。僕は高校時代剣道をやっていたから腕には自信がある。相手が素人なら、たとえ向うが日本刀の真剣持ってたってべつに怖かなかったさ。その頃はね。今なら一目散に逃げるよ、もちろん。

当時の僕は、体制打破は正しいと思い、放浪生活も正しいと思い、夜中の学校に一人いても平気だったし、その頃は「まったく怖いもの知らず」だったと言う。これらが示しているのは単に若者の無鉄砲さではなく、自分には世界は分かる、自分が何をすべきかも分かるという感覚であり、自己と世界の意味が揺らいでいない状態だったということである。それに対し、現在の僕は「今なら一目散に逃げる」という。これは、単に「怖いもの知らず」の勇気を失ったというだけではなく、安定した自己を失ったことによって、対象と対峙するための足場を失ったということでもあろう。つまり、冒頭における放浪や学生運動の話は単なる時代背景ではなく、かつての僕のありようを示すことで、それと現在の僕との落差の大きさを表しているのである。

では、現在の僕はどういう地点に立っているのか。僕は当時の自分を「若気のいたり」と呼び、現在の自分との距離を示しつつ、決して当時の自分を否定するのではなく、「今から考えてみれば

楽しい生活だった」、「それが正しかったとか間違っていたとかじゃなくて、もう一度人生をやりなおすとしても、たぶん同じことをやっているだろう」として、当時の自分の生き方を肯定している。これは、現在の僕は生き方への確信は失ったが過去は捨てられないということであり、若い頃の自分を全面的には肯定も否定もできない位置にいることを示している。もし僕が当時の自分を完全に肯定するか、否定するかのどちらかの立場に立っているのであれば、僕は現在の自分の立場から確信をもって当時の自分を語ることができるはずだが、「鏡」の語りはそうではない。ここで僕は確かに自分の出会った「怖いもの」を語っているのだが、その「怖いもの」を説明するのではなく、それは「説明できない」ということをこそ語っている。かつての出来事は、僕自身を分かっていると思う自分から分からないと思う自分へ変容させたのだが、現在の僕は今分からない自分を引き受けて生きる自分としてその出来事を語っているのである。

僕の語りを見れば、僕は最初鏡の中の僕について、それが「僕である」か「僕でない」かの二極間を揺れ動き、その間でなんとか自己同一性を保とうとしているように思われる。僕は相手が「外見はすっかり僕」であり、「正確に言えばそれはもちろん僕」であることを確認するのだが、他方では相手が僕の自己同一性を強く否定する存在（「僕じゃない僕」）であることを疑うことができない。相手が「僕である」とすれば自己同一性は確保されるが、「僕でない」ことは僕を不安にし、パニックに陥れる。「鏡」は、僕の自己同一性をめぐって繰り広げられる熾烈な戦いなのだが、鏡の中の僕（彼）は、僕ではない（「非−自己」）と同時に確かに僕（「自己」）なのである。従ってこれは、自己はどのようにして他者を排除することによって自己同一性を保とうとするのか、逆に言えば他者はいかにしてその自己同一性を内部から揺るがすのかという、主体内部のドラマであることになる。では、主体の内部でどういうドラマが展開しているのか。

Ⅲ 自己同一性の暴力と前言撤回の語り

それでは、本来別である主体的自己と客体的自己（非−自己）がどのようにして同一者とみなされるのか。それは主体的自己が未知の客体である非−自己を既知の自己に還元することによる。我々が鏡に映る自分の鏡像を見て、自分自身を確認するのはそれである。その時主体としての自己が未知の非−自己を理解し、確認することで、その未知性は剥奪され、主体的自己に統合され同定される。しかしその時、他者（「非―自己」）は主体によって理解され、享受されることを拒む超越的な呼びかけとして主体の前に現れる。鏡の中に現れた彼は、そのようにして現れた超越的他者であり、確かに僕でありながら決して僕に回収されない他者性としての僕なのである。そうであるからこそ、僕の目には彼は「僕がそうあるべきではない形での僕」であり、「心の底から僕を憎んでいる」と感じられるのだが、彼の「憎しみ」として僕に経験されたものは、主体としての僕が他者を自己同定しようとする運動そのものが、鏡像を介して反照された経験であったことになる。

自己同一性の暴力性とは、主体自身の暴力性なのではなく、自己同一性という構造そのものに暴力性が内在しているということであり、それは「私は私である」という仕方で世界を理解すること自体が、他者を自己へ回収する運動を含んでいるということである。そして、そのように見れば、僕の鏡像である彼が僕を「支配しよう」とする事態が発生する理由も明らかであろう。それは次のような場面である。

> やがて奴の方の手が動き出した。右手の指先がゆっくりと顎に触れ、それから少しずつ、まるで虫みたいに顔を這いあがっていた。気がつくと僕も同じことをしていた。まるで僕の方が鏡の中の像であるみたいにさ。つまり奴の方が僕を支配しようとしていたんだね。

僕は「まるで僕の方が鏡の中の像であるみたい」と感じ、さらに「奴の方が僕を支配しようとしていた」と言う。だが、彼を自己同定することで支配しようとするのは主体としての僕であり、鏡に映った彼の動作は、僕自身のそうしたありようの写像に他ならない。つまり、僕を支配しようとする鏡像としての「もう一人の僕」とは、他者を自己同定して支配する僕の暴力性を体現するのであり、だからこそ、対象化された側から見た相手に「まっ暗な海に浮かんだ固い氷山のような憎し

み」「誰にも癒すことのできない憎しみ」を見て取ることになったのである。

＊

非−自己を自己に同定する自我は、出来事のただ中にいながらその外に自己を置き、その自己を基盤として世界のすべてを対象化する。そういう主体は、「私はいま……を経験している」という形で「経験しつつある自己」を冷静に語る眼差しに自己を同定し、未知の非−自己を既知に還元して、「○○である」と明確に語ることができる。しかし、鏡の中の僕に対面した僕は、それを許さない絶対的な他者に出会ったのであり、それが、僕の内なる「もう一人の僕」である。その時僕は「それは僕じゃない」と言った後で、いや「僕なんだ」と言い直す。僕は、分裂した自己を鏡の中に見ながら、前言撤回を繰り返すのは、自己の分裂に立ち会いながら、なお自己同一性にこだわる僕の抵抗である。その時、もう一人の僕が、僕に向かって「お前はそんなふうに自分を一つに固定できると思っているかもしれないが、それは間違いだ」と迫るのである。

しかしそうであれば「もう一人の僕」の呼びかけは、実は僕に対する倫理的な呼びかけということにならないか。なぜなら倫理とは主体の自由を中断し、その自己同一性を破る出来事だからである。現に、「もう一人の僕」に呼びかけられる僕は、自己同一性に閉じこもって他者を支配する自己（僕）であり、それこそが「そうあるべきではない形での僕」そのものだからである。我々はしばしば、倫理を優しさや共感、思いやりの温かさとしてイメージする。しかし、倫理とは実は「そうあるべきではない形での僕」の自由を中断し、自己同一性に閉じこもった主体から、他者への応答に開かれた主体へと生き方を転じることへの呼びかけなのではないだろうか。

「私」に出現し、対面する他者は「私」の意識の深部に生きる「非−私」であり、その声は確かに「私」の内部から呼びかけて来るのであり、「私」の意識的な統御には絶対に服さない自律的な何かである。その呼びかけは、例えば自然の促しや罪の覚知、自意識や自尊心の逃れ難さ、さらには自己形成の上で決定的な意味を持つ過去の記憶等様々な形をとるであろうが、それらのいずれもが自身の深い内面からの呼びかけである。内なる他者（非−自己）から自己に向けられたそれらの呼びかけは、同一者の二つの意味層の間でのやりとりであるといえる。人間とはそのように切り離すことのできない二つの層に引き裂かれつつ、その呼びかけにどう応答するかがその人の生き方における重要な選択となる。「私」は自身の主体的能動性に従って自己を統御しようとするし、その呼びかけに全面的に従い、身をゆだねることは、自己の主体性を放棄した敗北としか考えられないであろう。「鏡」における僕と鏡の中の僕の関係は、人間の生におけるそのような関係を凝縮して表したものであり、そういう出来事は決して「鏡」だけでなく多くの小説で繰り返し取り上げられる[6]。いずれの場合においても、これは人間が自身の内なる他者の声とどう対面し、どう対応するかという問題であり、それは人が人生において出会う最も重要な出来事であるように思える。

要するに、倫理とは主体の自由を中断して自己同一性を破る要求なのであり、それは言い換えれば、「私は私である」という自由を失うことである。つまり「鏡」で出会った僕の恐怖とは、自由な主体であることを中断させられる恐怖であり、そこにこの出来事が僕にとって本当に恐ろしく感じられた理由があるのではないだろうか。それだけに、僕は彼の呼びかけを受け入れることができなかったし、その呼びかけを通じて自己理解に至ることもなかった。しかし、そこでもっとも重要なことは、自己を理解することではない。僕が、前言撤回の語法によって自己の体験を語ったということは、見るという仕方では決して接近できないもの、つまり自己に分裂をもたらし葛藤の中に落とし込むもう一人の僕との対面の事況という語り得ない出来事を語ろうとしたことである。しかし、主体とは本来自己完結した存在ではなく、他者によって絶えず自己同一性を破られ続ける存在であるとすれば、鏡の前から一度逃亡したら終わりということにはならないであろう。人間にとって、語るとは自己同一性の破れを閉じて葛藤を終わらせることではなく、破れとともに生きる道を探り続ける営みであり、それこそが最も重要なことなのではないだろうか。

Ⅳ 鏡のない家に住むことと時間

[6] 例えば、漱石『それから』『門』『心』や『夢十夜』（「第三夜」）等における罪の意識、中島敦『山月記』における自意識、村上春樹「スパゲティーの年に」「五月の海岸線」における過去の記憶、遠藤周作『沈黙』における神の声等。

僕が家に「鏡を置かない」（日常的に自分の鏡像を見ない）ことと僕の前言撤回の語り（「語れないこと」を語ろうとすること）はどのように関係しているのか。

僕が鏡を捨てたということは、分裂した自己と再び遭遇することへの忌避であり、それは鏡を見ることで「私＝私」という自己同一性の確認が失敗することへの恐怖の大きさを示している。今も家に「鏡を置かない」のは「視覚的な自己同一性」の崩壊からの逃亡である。しかし、それは自己同一性を諦め、放棄するということではない。というのは他方で、僕はその体験を物語として語ることを選択したからである。僕は現実には出来事から逃げながら、言葉の中で出来事に戻ってくるのである。この「逃げながら語る」という矛盾した姿勢こそが、僕の語りを駆動する原動力であるように思われる。

前言撤回の語りとは、単に出来事をありのまま再現することではなく、他者との対面という語り得ない出来事を語ろうとすることであり、それは自分を超えた他者の呼びかけに応答することである。「いや、違うな」「正確に言えば」「うまく言えない」とどこまでも前言撤回の語りを続けて行くことは、その出来事の意味を説明できないことと、その出来事が自分を変えてしまったことを確認し続けることに他ならない。それは出来事を説明しているのではなく、自己同一性の破れを自ら生き続けることではないか。それは、その出来事によって開いてしまった自己の裂け目を閉じないための営みであり、いわば証言ともいえる。だからこの小説は、「自己の分裂を克服した人の物語」でも、「分裂を受け入れた人の物語」でもなく、分裂を受け入れられないまま語り続ける人の物語なのであろう。

〇「その出来事の意味を説明できない」は、その出来事を外側から見ているということ。巫女が神のお告げを語る場合に、神の言葉をうまく言えていないという事は起こり得ない。判断のシステムから手を切るという事は、否定の論理を交えるということにならない。

〇前言撤回が起こるためには、「判断」が何処かに入っていなければ、そうならないと思う。私は考える、私は思うという部分が残っていなければ、前言撤回にならない。

◇語り手の意図（判断）が言葉を主導するのではなく、**言葉のメカニズム自体**が言表を駆動する原動力となる。

〇「AはBだ。」「AはBだ。」

〇奈原＝「判断」と「発話（語り）」この小説の時代背景は判断というのが社会的に決まっていて、イデオロギーが柔軟な議論を生むモノではなく、当時の判断思想が大学において唯物論的イデオロギーに凝り固まっていた。先輩から一緒に勉強しませんかと声がかかり共産党宣言などを読み、体制打破のイデオロギーが真理のように提示されて、学ぶ側の思想と行動が歴史的必然として決まっているという議論が当たり前に通用していた時代。

語りの重要性＝実存主義、イデオロギーと実存主義の対立＝自己同一性をめぐる対立と重なる

フロイトの深層心理＝何事も深層心理に拠って決まる観念論的テーゼ、金縛り、自己自身の自由な考えを非常に束縛された時代を鏡を割るように破壊して、自由な語りの次元を確保しようとしたのが「鏡」という小説の本質。

〈主体が自己同一性を維持しようとする運動＝語り／私を支配する他者性＝金縛り〉

〇田中＝僕の家に何人か集まって体験談を語り合う場。全体を通して見れば僕の一人語り。自問自答と言うか、自分で発してそれを撤回し、また発する。他人の発言は書いていない。鏡を割るという行為についても、鏡を割ったと僕は思っても、実際に鏡はない。鏡を割り続けているという言い方はできるのか、疑問。僕自身の高校からの生きざまとその時々においてそれを否定するもう一人の自分がずーっといて、それが積み重なって今の僕になり、それが爆発したのがこの夜の出来事と考える。僕にとっての鏡とは何なのか。鏡のない生活というものが僕にとって何なのか。僕が本当の自分は何かという葛藤を描いている。「「鏡」は、主体が自己同一性を維持しようとする運動と、それを不可能にする他者性との根源的な葛藤を描いた作品であり」

このことは、「見ること」と「語ること」の関係に深くかかわって来る。見るということは、い

ま・ここにあるものを空間的な像として確定することである。つまり、視覚とは本質的に「同一性」を要求する感覚であり、「私＝私」であることを前提とする。それにもかかわらず、「鏡」の僕の体験は、見えている鏡像は私であるのにその像は私ではないという出来事であり、それは視覚の前提をなす同一性の崩壊を紛れもなく示す。だからこそ僕は「見ること」に耐えられなくなった。しかし言語は視覚的表象とは違う。言語（語り）はそもそも時間の中で展開するのであり、出来事と語りは完全な同時性を持ちえない。鏡を見ることは自己を空間的に確認することであるのに対し、語ることは自己を時間の中に置くことである。むしろ語りは常に出来事に遅れてやって来る。つまり言語は最初から「ズレ」を含んでいるのであり、語りは「同一な自己」ではなく「ずれている自己」から生まれるとさえ言える。見ること（鏡）では自己を維持できなくなった僕が、見ることとは別の仕方で自己を成立させる営みが語ることなのである。

ここから、時間の問題が開けて来る。それは、時間とは自己同一性と深くかかわるからである。もし完全に自己同一なら、自己は常に同じ自己であり続けるだけであるから、そういう私に時間は流れない。しかし、「もう一人の僕」は、僕には理解も支配もできず、既知に回収されないまま外部から僕の許に到来しつづけるのであり、その出来事は今も未知の出来事として僕に呼びかけ続ける。要するに、時間とは私＝私という自己同一性が他者によって中断され、その中断への応答が終わりなく続いていく運動である。「もう一人の僕」との出会いの経験は、僕の自己同一性を脅かし続けるのであり、その語りは出来事を閉じるためではなく出来事を現在に開き続けるための営みである。それによって時間は流れ続けるのである。

「前言撤回」とは、単に間違ったことを言ったから訂正するということではない。それは何かを言った瞬間に、その言葉が他者を対象化し、固定化してしまうので、それを再び崩さなければならないという運動である。それは、常に変化し続ける生きた対象を存在論的命題によって固定化することを拒否しつづける終わりのない運動なのである。その意味で、語り手である僕は「前言撤回」を体験として生きている。語り手が「あれは別人だった」と確定すれば経験は対象化されるし、逆に「あれは私だった」と確定しても、やはり経験は概念化されてしまう。しかし僕はそのどちらにも留まれず、「そう言ってしまうと違う」を繰り返し続ける。このとき語りは何かを定義する営みではなく、定義し得ないものに応答し続ける行為となる。言葉が生きた対象を表現しようとすれば、そこでは何らかの形で前言撤回の運動が志向されるのではないだろうか。

時間の中では、「私」は一つの像として固定されるのではなく、「いや、違うな」「正確に言えば」と言い直し続ける運動の内に自己を更新し続ける。「自己同一性」「他者性」「前言撤回」等の出来事は、時間の中に置くことで自己が他者によって絶えず更新され続ける出来事なのである。僕は「いや、違うな」と言う前言撤回の言葉を発するたびに、主体はわずかずつ自分自身が作った同一的自己像や存在論的定義からずれていく。そして、そのことによって、人は流れる時間の中を生き始める。だが、実はそれこそ人が倫理への道を開き始めことなのではないだろうか。

「鏡」は、主体が自己同一性を維持しようとする運動と、それを不可能にする他者性との根源的な葛藤を描いた作品であり、読者は「自己とは何か」「他者とは何か」という哲学的問題を、小説という形式を通じて自ら経験する。「鏡」は、自己同一性の崩壊を描いた作品ではなく、自己同一性とは本来成立しえないことを、小説という形式によって読者に経験させる作品なのではないだろうか。

〇楯谷：そこまで怖いというのが腑に落ちない。
〇佐野：なぜ、彼は語ったのか＝作者が作家になって行く決意と連動する
〇大藤：自分が自分であり続けるが問題にならなくなる＝怖いこと
〈僕〉は自分が自分であり続けることを否定して来る。自己同一的であれ！　自己同一的であるな！
〇加島：鏡の中の僕は、前提だらけの〈僕〉に対して、「本当にそれでいいのか。」と問うている
〇岡部：当たり前のように自分を意識することが病気だ。自分が立ち上がる前を問題にしたい。
〇佐野：怖さを説明してしまうと怖さは消えてしまう。

○「説明」＝対象の定義＝A は B だ。私は私だ。私は私でない。＝判断する主体が外側から見る。＝主体の自己同一性の確保が必要。
○「語り」＝定義しない＝出来事をそのまま表現する。述べるだけ。
○前言撤回の必然性。
○文学の語りが外側から説明するというのに違和感があって、前言撤回のためには最初に説明が必要である。
○文学の場合、外から判断することからは成り立たないような気がする。

○私は私だ。
○判断する場合は、主客に分かれて、判断主体が判断する（自意識が残っている）「私が思う」。
○語り手が出来事を語るとき、語り手という主体が外側から出来事を語るのではない。
○語りが語る場合、「私が思う」（自意識）という「地」が残らないと思う。
○判断すると、不自然になる。行為の純粋性が失われる。語りも同じだろう。
○中島敦の「憑き物」のした作者（自意識を失った）のことを語り手という。
○語り＝巫女の託宣（詩神）
○この二つが本当に分かれるかどうか。自己ならざる「非―自己」
○根源的な自己同一＝決定的に分裂しているのだが、単に分裂というだけではない＝「呼びかけ」と「応答」
大藤「鏡を割れなかったばっかりに」
○自分自身が作った自己構想が崩れている。

「見る」と「語る」の区別
「空間」と「時間」の区別
「主体が自己同一性を維持しようとする運動」と「それを不可能にする他者性」の区別
この二つを区別しない場というのはないか？
区別を前提としない考え方
「反省（判断）」と「直観」を分けるのはそれ自体が「反省（判断）」

〈『村上春樹全作品』版テキスト〉

鏡

村上　春樹

73

さっきからずっとみんなの体験談を聞いてるとね、そういったタイプの話にはいくつかのパターンがあるんじゃないかって気がするんだよ。まずひとつはこちらに生の世界があって、あちらに死の世界があって、それが何かの力によってどこかでクロスするっていうタイプの話だね。たとえば幽霊とか、そういうの。それからもうひとつは三次元的な常識を超えたある種の現象や能力が存在するってことだね。つまり予知とか虫の知らせとかね。大きくわけるとそのふたつに分類できると思うんだ。

で、そういったのを総合してみるとさ、みんなどちらか一方の分野だけを集中して経験しているような気がするんだな。つまりさ、幽霊を見ている人はしばしば幽霊は見るんだけど、虫の知らせを感じることはまずないみたいだし、虫の知らせをよく体験する人は幽霊って見ないんだね。どうしてだかはよくわからないけれど、そういう個人的な傾向というのはたしかにあるみたいだね。何となくそういう感じがするんだ。

それから、もちろんどちらの分野にも適さないって人もいる。たとえば僕がそうだね。僕はもう三十何年生きているけれど、幽霊なんて一度も見たことがない。予知夢とか虫の知らせとか、そういうのを経験したこともない。二人の友だちと一緒にエレベーターに乗っていて、彼らが幽霊を見ていながら、僕はまったく気づかなかったということもある。二人ともグレーのスーツを着た女が僕のわきに立っていたっていうんだけど、女なんて絶対に乗ってなかったんだ。我々三人きりだった。嘘じゃないよ。それにそのニ 74 人もわざわざ僕をかつぐようなタイプの友だちじゃないんだ。まあそれはそれですごく気味の悪い体験だったけど、それにしても僕が幽霊を見てないということに変わりはない。

とにかくそうなんだ。僕という人間は幽霊だって見ないし、超能力もない。なんというか、実に散文的な人生だよな。

でも僕にも一度だけ、たったの一度だけ、心の底から怖いと思ったことがある。もう十年以上前の話なんだけど、これまで誰にも話したことはない。口に出すことさえ怖かったんだ。口に出しちゃうと同じようなことがまた起こるんじゃないかって気がしてね、だからずっと黙ってた。でも今夜はみんなが順番にそれぞれ怖い体験談を聞かせてくれたわけだし、主人である僕が最後に何も話さずに場を閉じるというわけにもいかない。それで、僕も思い切って話してみることにする。

いや、いいよ、拍手はよしてくれよ。そんなたいした話でもないんだからさ。

前にも言ったように幽霊も出てこないし、超能力もない。僕が思っているほど怖い話じゃなくて、なんだということになっちゃうかもしれない。ま、それはそれでいい。とにかく話すよ。

一行空き

僕が高校を出たのは六〇年代末の例の一連の紛争の頃でね、なにかといえば体制打破という時代だった。僕もまあそんな波に呑みこまれた一人で、大学に進むことを拒否して、何年間か肉体労働をしながら日本中をさまよってたんだ。そういうのが正しい生き方だと思ってた。ま、若気のいたりというかね。でも今から考えてみれば楽しい生活だったよ。それが正しかったとか間違っていたとかじゃなくて、もう一度人生をやりなおすとしても、たぶん同じことをやっているだろうね。そういうもんだよ。

放浪の二年めの秋に、僕はニヵ月ばかり中学校の夜警をやった。新潟の小さな町のある中学校さ。僕はちょうど夏のあいだかなりタフに働いたせいで、少しのんびりしたかったんだ。なにしろ夜警ってのは楽 75 なんだよ。昼間は用務員室で寝かせてもらってさ、夜中になってから全校舎を二回チェックすればいいだけだからね。それ以外は音楽室でレコード聴いたり、図書館で本を読んだり、体育館で一人でバスケット・ボールをしたりしてたよ。夜中に学校で一

人きりというのは悪くなかったね。いや、ちっとも怖くなんてないさ。だって十八、十九の頃なんてまったく怖いもの知らずだもんね。

君たちは中学校の夜警なんてしたことないだろうから手順を一応説明しておくと、見回りは午後の九時と午前の三時に一回ずつやるんだ。そういう風に決められている。校舎は結構新しいコンクリートの三階建てで、教室の数は十八から二十。そんなに大きな学校じゃないんだ。それに音楽室とか裁縫室とか美術室、それに職員室やら校長室なんかがある。校舎以外には給食室とプールと体育館と講堂がある。それだけをざっと見回るわけさ。

一行空き

見回るチェック・ポイントは二十くらいあって、歩いてひとつひとつそれを確かめ、ボールペンでＯＫサインを用紙に書き込むんだ。職員室――ＯＫ、実験室――ＯＫ、てぐあいにね。もちろん用務員室に寝転んだままＯＫ、ＯＫって書いちゃうこともできる。でもそこまで手は抜かなかったよ。というのは見回ったってまあたいした手間ではないし、それに変なのがしのびこんでたりしたら、寝込みを襲われるのはこちらだものね。

で、九時と三時に僕は大型の懐中電灯と木刀を持って学校をまわる。左手に懐中電灯、右手に木刀だよ。僕は高校時代剣道をやっていたから腕には自信がある。相手が素人なら、たとえ向うが日本刀の真剣持ってたってべつに怖かなかったさ。その頃はね。今なら一目散に逃げるよ、もちろん。

それは十月の初めの風の強い夜だった。寒くはなかった。どちらかというとむし暑いくらいの気候だった。夕方ごろからやけに蚊が多くてね。もう秋だというのに蚊取線香を二つ点けてたのを覚えてるよ。ず 76 うっと風が音を立てていた。ちょうどプールの仕切り戸が壊れていてね、これが風にあおられてばたんばたんとうるさかった。なおそうかとも思ったんだけど、暗くてなおしようもなかった。それで一晩中ばたんばたんさ。

九時に見回った時には何も起こらなかった。二十のチェック・ポイントは全部ＯＫだった。鍵はちゃんとかかっているし、何もかもちゃんとあるべき場所にあった。変わったことは何もない。僕は用務員室に一戻って目覚まし時計を三時にあわせてぐっすり眠った。

三時に時計のベルが鳴った時、僕はなんだかすごく変な気がした。うまく説明できないんだけれど、実に変な気分なんだよ。具体的に言うとね、起きたくないわけさ。体が起きようとする僕の意志を押しとどめてるような感じさ。僕は寝起きはとても良いから、そんなことってあり得ない。で、無理に起きあがって、見回りの仕度をした。あいかわらずばたんばたんていう仕切り戸の音がつづいていた。でもね、その音が何かしらさっきとは違うような気がするんだよ。気のせいと言われればそれまでだけど、うまく体に馴染まない。嫌だな、見回りたくないな、と思った。でもやはり意を決して行くことにした。だってそういうのって一度ごまかすと、その先何度もごまかすことになるからね。僕は懐中電灯と木刀を持って用務員室を出た。

嫌な夜だったよ。風はますます強くなって、空気はますます湿っぽくなっていた。肌がちくちくして、気持がうまく集中できないんだ。まず最初に体育館と講堂とプールを片づけた。どれもＯＫだった。戸は頭の狂った人間が首を振ったり肯いたりするみたいな感じでばたんばたん開いたり閉じたりしていた。すごく不規則なんだ。うん、うん、いや、うん、いや、いや、いや……っていった感じの音なんだよ。なんだか変なたとえだけど、その時は本当にそう感じたんだよ。

校舎の中もべつに異常はなかった。いつものとおりさ。ざっと見回って用紙のチェック・ポイントに全 77 部ＯＫサインを書き込んだ。結局何も起こらなかった。それで僕はほっとして用務員室に戻ろうと思った。最後のチェック・ポイントが給食室の横のボイラー・ルームで、これは校舎の東端にある。一方、用務員室は西端にある。だからいつも僕は一階の長い廊下を歩いて用務員室に戻ることになる。もちろんまっ暗だよ。月が出ていれば少しは明かりが入ってくるけど、そうでなきゃまるで何も見えない。懐中電灯で少し先を照らしながら歩いていくわけさ。その夜は台風が近いから、もちろん月なんて出てない。ほんの時たま雲が切れても、すぐにまたまっ暗になってしまう。

その夜はいつもより急ぎ足で廊下を歩いた。バスケット・ボール・シューズのゴム底がリノ

リウムの上でシャキッ、シャキッって音を立てた。緑のリノリウムの廊下さ。苔がはえたみたいなくすんだ緑色だった。今でもよく覚えてるよ。

その廊下のまん中あたりに学校の玄関があるんだけどね、そこを通り過ぎた時に突然「あれ！」って感じがしたんだ。暗闇の中で何かの姿が見えたような気がしたんだ。わきの下がひやっとした。僕は木刀を握りなおして、そちらの方向に向きなおった。そしてそちらにぱっと懐中電灯の光を投げかけた。下駄箱の横の壁あたりだ。

そこには僕がいた。つまり——鏡さ。なんてことはない、そこに僕の姿が映っていただけなんだ。昨日の夜まではそんなところに鏡なんてなかったのに、 いつの間にか新しくとりつけられていたんだな。それで僕はびっくりしちゃったわけさ。全身が映る縦長の大きな鏡だった。僕はほっとすると同時に馬鹿馬鹿しくなった。なんだ、くだらない、と思った。それで鏡の前に立ったまま懐中電灯を下に置き、ポケットから煙草を出して火をつけた。そして鏡に映った僕の姿を眺めながら一服した。窓からほんの少しだけ街灯の光が入ってきて、その光は鏡の中にも及んでいた。背中の方からはばたんばたんっていうプールの仕切り戸の音が聞こえた。78

煙草を三回くらいふかしたあとで、急に奇妙なことに気づいた。つまり、鏡の中の像は僕じゃないんだ。いや、外見はすっかり僕なんだよ。それは間違いないんだ。でも、それは絶対に僕じゃないんだ。僕にはそれが本能的にわかったんだ。いや、違うな、正確に言えばそれはもちろん僕なんだ。でもそれは僕以外の僕なんだ。それは僕がそうあるべきではない形での僕なんだ。

うまく言えないね。この感じを他人に言葉で説明するのはすごく難しいよ。

でもその時ただひとつ僕に理解できたことは、相手が心の底から僕を憎んでいるってことだった。まるでまっ暗な海に浮かんだ固い氷山のような憎しみだった。誰にも癒すことのできない憎しみだった。僕にはそれだけを理解することができた。

僕はそこにしばらくのあいだ呆然として立ちすくんでいた。煙草が指のあいだから床に落ちた。鏡の中の煙草も床に落ちた。我々は同じようにお互いの姿を眺めていた。僕の体は金しばりになったみたいに動かなかった。

やがて奴の方の手が動き出した。右手の指先がゆっくりと顎に触れ、それから少しずつ、まるで虫みたいに顔を這いあがっていた。気がつくと僕も同じことをしていた。まるで僕の方が鏡の中の像であるみたいにさ。つまり奴の方が僕を支配しようとしていたんだね。

僕はその時、最後の力をふりしぼって大声を出した。「うおう」とか「ぐおう」とか、そういう声だよ。それで金しばりがほんの少しゆるんだ。それから僕は鏡に向って木刀を思い切り投げつけた。鏡の割れる音がした。僕は後も見ずに走って部屋に駆けこみ、ドアに鍵をかけて布団をかぶった。玄関の床に落としてきた火のついた煙草のことが気になった。でも僕はもう一度そこに戻ることなんてとてもできなかった。風はずっと吹いていた。プールの仕切り戸の音は夜明け前までつづいた。うん、うん、いや、うん、いや、いや、いや……って具合にさ。79

一行空き

こういう話の結末ってわかると思うんだけれど、もちろん鏡なんてはじめからなかったよ。

太陽が昇る頃には台風はもう去っていた。風もやんで、太陽が暖かいくっきりとした光を投げかけていた。僕は玄関に行ってみた。そこには煙草の吸殻が落ちていた。木刀も落ちていた。でも鏡はなかった。そんなのもともとなかったんだよ。玄関の下駄箱のわきに鏡がついたことなんて一度もなかったんだ。そういうことさ。

というわけで、僕は幽霊なんて見なかった。僕が見たのは——ただの僕自身さ。でも僕はあの夜味わった恐怖だけはいまだに忘れることができないでいるんだ。そしていつもこう思うんだ。人間にとって、自分自身以上に怖いものがこの世にあるだろうかってね。君たちはそう思わないか？

ところで君たちはこの家に鏡が一枚もないことに気づいたかな。鏡を見ないで髭が剃れるようになるには結構時間がかかるんだぜ、本当の話。

大藤:支配されるのが怖い。支配されたらどうなるのか？　支配しようとしたが、支配されませんでしたという結末はつまらない。鏡は二枚ある。
「僕の鏡」が映し出したのは、若い時の当時の僕　＝図＝日常的ないろいろなモノを見ている
「〈僕〉の〈鏡〉」＝世界（見性時の世界）だけが映し出される＝地を見ている＝〈鏡〉を割らなくてはいけない　世界のポテンシャルが僕のせいでうまくこれとして浮かび上がらなくなっている。だから、〈僕〉にのっとられてしまい、僕には見えなくなっていって行く。〈僕〉（僕）は「それ」を信じたい。
自分が一番怖い者であるという
加島:鏡を割らなかったら、この小説は書けない。書けちゃうことが怖い。でもそうするしかないのも怖い。何の前提もなくなる＝自分も信じられなくなる＝良くわかる＝そんなことを聞いていたら歩けなくなる。本当に壊れちゃったら書けなくなる。けど結局書いちゃっているから。
大藤:自分が壊れているから、鏡を割らなくて、どうにもならなくなっている人を書きたいという欲望。
楯谷:批判ととらなくてもよいのではないか？
加島:観察者の自分が乗っ取られて無くなってしまうのが怖い。確かに自分自身が一番怖いのかな。
岡部:アングルそのものを問いかけている作品に思える。自分自身を思うという捉え方を捉え直そうするのがこの小説の冒険。それを際立たせるためにあえてオーソドックスな書き方をした。
楯谷:自分を持たない人は無敵。何事に関しても素通りさせてしまう。
佐野:「語る」とは対象化するとできない。〈僕〉になりきらないと語れない。
鏡を見ている僕ー見る主体　説明する主体
鏡の中の〈僕〉ー「語る」主体、説明する僕が消えなくてはならない。外から見ている僕が消える。
表現する〈語る／説明する〉